

大分県立埋蔵文化財センター

研究紀要

2

大分の考古学史
- その調査と保存の歩み -

宮内克己

埋蔵文化財センター（平成29年度）

埋蔵文化財センター要覧

大分県立埋蔵文化財センター

研究紀要

2



開館記念講演会「大友氏と戦国時代」



開館記念式典

目次

口絵

埋蔵文化財センター年報（平成29年度） 1

埋蔵文化財センター要覧 16

大分の考古学史

- その調査と保存の歩み -

宮内克己 20

第1章 平成29年度 大分県立埋蔵文化財センターの事業実績

I 埋蔵文化財保護行政の中核的役割を担う

1 発掘調査の推進

県事業関係の発掘調査は府内城・城下町2件、五ヶ瀬遺跡1件の計3件、国土交通省と県土地開発公社の受託事業3件を合わせて6件の本調査を行った。また、分布調査は県土木建築部事業関係が557件、県農林水産部関係が132件であり、試掘・確認調査は県土木関係等およそ60か所で行った。

(1) 本調査（6件）

第1表 県事業関係本調査箇所

事業主	事業名	遺跡名等	所在地	調査期間	調査面積	調査担当	主な時代	主な遺構・遺物
1	施設整備 課	県庁別館受変電 棟増築	府内城・城 下町	大分市	6月5日～ 6月30日	292㎡	小林昭彦	近世・近代 土坑 陶磁器・ 瓦・銭貨等
2	大分土木 事務所	県道庄内久住線 道路改良工事	五ヶ瀬中遺 跡	由布市	10月10日～ 11月15日	857㎡	土谷崇夫	弥生・古墳 堅穴建物・土坑 弥生土器・土師器
3	県有財産 経営室	知事公舎建替事 業	府内城・城 下町	大分市	2月9日～ 2月28日	370㎡	土谷崇夫 園田涼太	近世 堀 陶磁器

第2表 受託事業関係本調査箇所

事業主	事業名	遺跡名等	所在地	調査期間	調査面積	調査担当	主な時代	主な遺構・遺物
1	大分県土地 開発公社	玖珠工業団 地造成	四日市遺跡 第16次調査	玖珠町	4月11日～ 9月29日	11,974㎡	後藤晃一 服部真和	旧石器・弥生 堅穴建物・土坑 弥生土器等
2	国土交通省 大分河川国 道事務所	三光本耶馬 溪道路	古戸遺跡第 3次調査	中津市	6月8日～ 9月18日	3,854㎡	井大樹	縄文・弥生・ 古代 溝・包含層 弥生土器
3	国土交通省 大分河川国 道事務所	賀来川東院 地区築堤岸 外工事	賀来条里跡	大分市	10月10日～ 12月1日	561㎡	吉田寛 園田涼太	弥生・中世 流路・溝・土坑

(2) 分布・試掘・確認調査（749件）

第3表 分布・試掘・確認調査件数

	区 分	調査件数	期 間	調査担当	備 考
1	県土木建築部事業分布調査	557	4月～平成30年3月	横澤・土谷他	
2	県土木建築部他事業試掘・確認調査	56	4月～平成30年3月	横澤・土谷他	要本調査5件
3	県農林水産部事業分布調査	132	4月～平成30年3月	横澤・土谷他	
4	国土交通省 三光本耶馬溪道路	1	4月～平成30年3月	井	
5	芸術文化短期大学 確認調査	1	4月～平成30年3月	吉田	
6	豊後高田簡易裁判所仮庁舎新営工事	1	4月～平成30年3月	吉田	
7	県土木建築部事業分布調査	1	4月～平成30年3月	井	

(3) 整理・報告書等

発掘調査にかかる遺物の整理作業を継続して行い、その調査報告書として『清水遺跡第2次調査』、『山迫遺跡』、『原田第1遺跡』、『カジメン遺跡』の県道関係4冊を刊行した。

第4表 平成29年度に刊行した印刷物

	報告書番号	遺跡名等	副題等	担当者	総頁数
1	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書第1集	清水遺跡第2次調査	県道鶴崎大南線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	宮内克己	A4版 68頁
2	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書第2集	山迫遺跡	県道成仏杵築線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	小林昭彦	A4版 94頁
3	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書第3集	原田第1遺跡	県道三重新殿線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	綿貫俊一	A4版 92頁
4	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書第4集	カジメ遺跡	県道万田四日市線交通安全事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	横澤慈	A4版 32頁
5	大分県内遺跡発掘調査概報21			土谷崇夫	A4版 30頁
6	大分県立埋蔵文化財センター研究紀要第1集			松本康弘 後藤晃一	A4版 76頁

(4) 市町村指導

中津市及び玖珠町教委が行った発掘調査において、専門的な調査指導を行ったほか、国東市職員を長期研修生として受け入れ、発掘調査や展示、文化財行政についての指導を行った。

① 調査指導

第5表 調査指導内容

	調査指導	場所	期日	担当	指導内容
1	梨ヶ谷窯跡発掘調査指導	中津市福島	9月3日ほか	小林昭彦	中津市教委が実施している発掘調査の現地指導
2	四日市遺跡横穴墓発掘調査指導	玖珠町四日市	10月3日ほか	小林昭彦	玖珠町教委が実施している発掘調査の現地指導

② 長期研修生の受入れ

第6表 長期研修生受入れ

	研修	期間	内容
1	国東市文化財課職員長期研修	1ヶ年(4月1日～平成30年3月31日)	発掘調査、文化財行政、展示等

③ 市町村文化財保護行政担当職員を対象とした研修

第7表 市町村担当者対象研修

	研修	期日	担当	内容
1	市町村担当者埋蔵文化財研修「写真撮影」	11月30日	友岡信彦	報告書用遺物写真の撮影方法

(5) 所蔵資料の活用

県立埋蔵文化財センターとして、新規オープンを図ったこともあり、昨年度の約3倍の32件もの資料・写真貸出し、資料調査等の対応を行った。

① 所蔵資料の貸出し

第8表 所蔵資料貸出し

	貸出機関	期間	内容
1	大分市教育委員会	4月25日	中世大友府内町跡の影三島茶碗の写真 史跡大友氏遺跡の広報のため『市報おおいた』へ掲載
2	神縄県立埋蔵文化財センター	4月26日	中世大友府内町跡ガラス製品の半定量分析結果 『中城御殿跡(首里高校内)』へ掲載
3	オフィス・マリオネット	5月22日	中世大友府内町跡出土品 『南蛮 BVNGO』のPVの背景写真に使用

	貸出機関	期間	内容
4	大分県立歴史博物館	5月29日～8月18日	炭竈遺跡出土品 アウトリーチ事業で竹田市久住公民館に展示
5	株式会社ベストセラーズ	6月19日	中世大友府内町跡出土のヴェロニカメダイの写真 『歴史人』8月号へ掲載
6	大分市教育委員会	6月30日	一方平Ⅰ遺跡出土石器等 『大分市の教育』に新指定文化財として掲載
7	大分県立歴史博物館	9月19日～11月10日	松木遺跡出土品 アウトリーチ事業で九重町文化センターに展示
8	別府市教育委員会	9月11日	「鬼ノ岩屋古墳・塚原出土須恵器」の写真 市報「べっぶ」10月号へ掲載
9	大分市歴史資料館	10月15日～12月24日	中世大友府内町跡出土品 開館30周年・大友氏館発掘調査20周年記念特別展
10	杵築市教育委員会	10月11日	「鬼ノ岩屋古墳・塚原出土須恵器」の写真 小熊山古墳・御塔山古墳 国指定記念企画展へ掲載
11	津久見市教育委員会	11月14日～11月29日	津久見門前遺跡出土遺物 「津久見市の文化財－守り語り継ごう地域のたから－」展示
12	九重町教育委員会	11月15日	中世大友府内町跡出土遺物 「よみがえる岐部城～玖珠郡衆と岐部氏」における展示
13	別府市教育委員会	11月28日	「鬼ノ岩屋古墳・塚原出土須恵器」の写真 「鬼ノ岩屋・実相寺古墳群の発掘調査展」で使用
14	岡山大学	1月9日～3月16日	中世大友府内町跡第20次調査出土猿形木製品 「瀬戸内海が育んだ交流の記憶」で特別展示
15	島根県立古代出雲歴史博物館	12月12日	「姫島観音崎の景観」等の写真企画展 「隠岐の黒曜石」の展示及び図録掲載
16	国立歴史民俗博物館職員	1月16日	西洋型鍵（杵築城下町遺跡出土） 写真論文掲載のため
17	万寿寺住職	2月16日	万寿寺跡遺構ほか写真
18	大分市教育委員会	3月7日	中世大友府内町跡出土遺物 大友氏遺跡史跡ボランティアガイド教本への掲載
19	大分市教育委員会	3月9日	浜遺跡の写真 大分市海部古墳資料館の常設展及び 解説用パンフレットに掲載
20	中津市教育委員会	4月～3月	上ノ原横穴墓群出土遺物 中津市歴史民俗資料館の常設展
21	大分市歴史資料館	4月～3月	中世大友府内町跡出土品 常設展示
22	島根県立古代出雲歴史博物館	4月～3月	大分市横尾貝塚出土の貝等 企画展示

② 所蔵資料の利用

第9表 所蔵資料利用

	利用者	期間	内容
1	国立科学博物館職員	5月24日	中世末における非鉄金属生産技術解明 中世大友府内町跡出土の金属生産関連遺物・金属製品
2	大分市歴史資料館職員	6月15日	特別展のための資料調査
3	大分市歴史資料館職員	6月18日	特別展のための資料調査
4	宮内庁書陵部読書課職員	7月20日	調査研究のため飛山4号横穴墓出土の馬具等の熟覧、 実測（報告書図面にメモを加筆）、写真撮影

	利用者	期間	内容
5	佐世保市教育委員会職員	7月29日	調査研究のため森の木遺跡の縄文草創期土器等の熟覧、実測（報告書図面にメモを加筆）、写真撮影
6	明治大学学生	9月6日	調査研究のため大分県出土須恵器の熟覧、実測（報告書図面にメモを加筆）、写真撮影
7	明治大学学生	9月11日	調査研究のため大分県出土須恵器の熟覧、実測（報告書図面にメモを加筆）、写真撮影
8	福岡市立博物館職員	10月6日	調査研究のため県内出土遺物の熟覧、実測（報告書図面にメモを加筆）、写真撮影
9	沖縄県立埋蔵文化財センター職員	2月1日	報告書作成のため中世大友府内町跡出土遺物の熟覧、実測（報告書図面にメモを加筆）、写真撮影
10	広島大学職員	3月23日	調査研究のため六麦遺跡の刻土器等の熟覧、実測（報告書図面にメモを加筆）、写真撮影

(6) 発掘調査現場の公開

埋蔵文化財センターが行う発掘調査現場で、一般県民を対象に説明会を開催した。

第10表 現地説明会一覧

	遺跡名	期日	内容	
1	四日市遺跡	9月2日（土）	第16次調査の概要説明	148名

II わかりやすい展示、楽しく学べる歴史体験

(1) 常設展示

① 豊の国考古館

大分県内で出土した発掘資料を基に旧石器時代から近世にいたる展示をすることで、大分県の通史を学ぶ。

② BVNGO大友資料館

中世大友府内町跡出土品を中心とした豊富な発掘資料の展示をすることで、戦国大名大友氏について学ぶ。



(2) 企画展示

4月の開館記念企画展「大友氏の栄華」をはじめ、年間5回の企画展を開催した。

① 企画展1 開館記念企画展

「大友氏の栄華～宗麟を巡る7つの鍵～」

平成29年4月22日（土）～6月25日（日）

開催期日 57日

入館者数 7,278名

「大友館」・「都市」・「南蛮」・「仏教」・「キリスト教」・「戦争」・「器（うつわ）」の7つの鍵（キーワード）を設定し、出土品や美術品・歴史資料から戦国大名大友氏の最盛期を築いた「宗麟」の実態に迫った。

（主な展示品）

大友宗麟画像（複製） ティセラ「日本図」（複製）

蒔絵螺鈿花鳥文筆筒 ザビエル胸像



② 企画展 2

「戦争の考古学」

平成29年7月19日（水）～9月18日（月）

開催期日 54日

入館者数 3,868名

弥生時代から近代までの武器にまつわる資料に焦点を当て、当時の社会的背景によって戦争がどのように武器を改良させ、軍事的施設の構築を行ったかに迫った。

（主な展示資料）

「戦争」が始まったと考えられる弥生時代の武器

古墳時代の副葬品から見える武器

戦国末期の豊薩戦争での被災遺物

明治初頭の大大分県における西南戦争の資料



③ 企画展 3

「石に込めた祈りの造形」

平成29年9月29日（金）～11月25日（日）

開催期日 51日

入館者数 3,024名

埋蔵文化財センターが実施した中世石造物調査の成果を公開し、県内にどのような石造物があるか、それらはどのような祈りを込めて造られたのかを、実物や拓本、写真等で紹介した。

（主な展示資料）

千燈寺石造宝塔 文殊寺石造十王像

石造釈迦三尊像 中世大友府内町跡出土四面仏石塔

和泉第2遺跡出土一石五輪塔 十三重塔出土土蔵骨器



④ 企画展 4

「話題の資料展」

平成29年12月8日（金）～平成30年3月11日（日）

開催期日 74日

入館者数 3,177名

昨年度、県内の発掘調査で新たに出土した資料や新指定の埋蔵文化財、新所蔵の考古資料等県内選りすぐりの発掘調査資料を一同に集め紹介。玖珠町四日市遺跡で出土した「鹿」の絵画土器も展示した。

（主な展示資料）

四日市遺跡線刻絵画土器「鹿」 日田城下町鍋島焼

定留鬼塚遺跡革袋形瓶 法垣遺跡人面付土器



⑤ 企画展 5

「豊と日向 ～日出る国の考古学～」

平成30年3月27日（火）～5月20日（日）

開催期日 5日（3月31日まで）

入館者数 415名

隣県である宮崎県との共通点や異なる側面について、主に古墳時代の考古資料を中心に明らかにした。

（主な展示資料）

西都原170号墳埴輪船（複製）

地下式横穴墓短甲



(3) ミニ企画展示

開館記念企画展「大友氏の栄華」の終了後、3回にわたりミニ企画展を開催した。

① ミニ企画展 1

「古墳の考古学」

平成29年7月4日（火）～10月9日（日）

国史跡に新指定された杵築市の小熊山古墳、御塔山古墳と追加指定された別府市の鬼ノ岩屋・実相寺古墳群の出土資料を中心に大分の古墳時代を考える。

(主な展示資料)

築山古墳人物埴輪 小熊山古墳饅付半裁楕円筒埴輪
御塔山古墳木槌形土製品 鬼ノ岩屋古墳横瓶
重光古墳方格T字八鳳鏡

② ミニ企画展 2

「須恵器の考古学」

平成29年10月11日（火）～平成30年1月14日（日）

伊藤田窯跡群（中津市）・虚空蔵寺窯跡群（宇佐市）・松岡古窯跡群（大分市）の古墳時代から古代の須恵器窯跡資料を通じて、大分の窯業生産を明らかにした。

(主な展示資料)

松岡古窯跡群3号窯跡円面視
虚空蔵寺3号瓦窯跡須恵器
穂屋1号窯跡須恵器

③ ミニ企画展 3

「中世城館の考古学」

平成30年1月16日（火）～5月6日（日）

鎌倉時代から安土桃山時代にかけて武家が台頭し、その居住のための館と戦いに備えた城が整備された。大分県でも569箇所の中世城館を確認している。展示では文献や絵図なども交えて大分の中世城館の実像に迫った。

(主な展示資料)

御領分臼杵図 臼杵城跡出土瓦
中津城跡出土瓦 高田城跡出土遺物
豊後国古城蹟并海陸路程 豊前中津之城図



(4) 歴史体験学習

歴史体験をとおして古代人の知恵を知り、生きる力をはぐむための体験学習を、毎日実施している。子どもたちは古代人になりきって、勾玉や土器作り、火おこし、組紐作りなどを学習している。

開館1年目の今年は約2,300人が体験をとおして歴史を楽しく学んだ。



第11表 歴史体験学習一覧

期 日	研修内容	会 場	参加者
1	勾玉製作	加工しやすい石(ろう石)を用いて、金やすりや紙やすりなどを使い、勾玉を製作する。	530名
2	犬形土製品製作	乾燥しやすいハニワ粘土を用いて、中世大友府内町跡の発掘調査で出土する犬形土製品を製作する。	270名
3	ミニ瓦製作	「瓦の製作工程を学ぶため、瓦の模様を入れた型に特殊な粘土を押し込み、ミニ瓦を製作する。	125名
4	古代機織り体験	簡易型の機織り機と毛糸を用いて、コースターや小形マットを製作する。	200名
5	組紐体験	刺繍糸3本もしくは5本を使い、自らの指先の動きで糸を組み上げ紐を製作する。	480名
6	火おこし体験	簡易な火おこし機(舞きり技法)を使い、藁に火をつける体験をする。	380名
7	鋳造体験	貨幣や巴型銅器、銅鐸などの鋳型に、低温度で溶ける金属を流し込み、製品を作る鋳造体験を行う。	100名
8	土器制作	陶芸用粘土を用いて、小形の縄文土器や弥生土器を製作し、乾燥後体験学習館に設置している電気窯で焼き上げる。	8名

勾玉作り 60分 300円

加工しやすい石(ろう石)を用いて、金やすりや紙やすりなどを使い、勾玉を作ります



犬形土製品作り 30分 100円

粘土を用いて、中世大友府内町跡の発掘調査で出土する犬形土製品を作ります



ミニ瓦作り 30分 200円

瓦の製作工程を学ぶため、瓦の模様を入れた型に特殊な粘土を押し込み、ミニ瓦を作ります



古代機織り体験

★小型マット(20cm×15cm) 60分 100円
★コースター(8cm×8cm) 40分 無料
簡単な機織り機と毛糸を用いて、コースターや小形マットを作ります



組紐作り 30分 無料

刺繍糸を3本もしくは5本使い、自らの指先の動きで糸を組み上げ紐を作ります



火おこし体験 30分 無料

簡単な火おこし機(舞きり技法)を使い、火をおこす体験をします



Ⅲ 教育普及の充実

(1) 講演会・講座

講師に奈良大学前学長の千田嘉博氏と東京大学史料編纂所教授の本郷和人氏をむかえて開催した開館記念講演「大友氏と戦国時代」をはじめ5回の埋文講演会を行った。そのほか考古学講座を8回、児童・生徒を対象とした特別講座を2回開催した。

① 埋文講演会 1

「大友氏と戦国時代」

平成29年5月21日（日）

コンパルホール（1階文化ホール）参加者400名

企画展「大友氏の栄華」に関連し、千田氏・本郷氏による講演と大分西高在校生による大友氏研究の成果発表、シンポジウムを開催した。



② 埋文講演会 2

「ここまでわかった大友氏遺跡」

平成29年6月10日（土）

第2講座室 参加者125名

企画展「大友氏の栄華」に関連し、別府大学上野准教授を講師に迎え講演会を開催した。また大分県と大分市の担当者が大友氏遺跡の最新の発掘調査成果を報告した。

③ 埋文講演会 3

「すごいぞ！大分の石塔」

平成29年10月8日（日）

大分県立図書館視聴覚ホール 参加者107名

企画展「石に込めた祈りの造形」に関連し、中世石造物研究の第一人者である元興寺文化財研究所の狭川副所長を講師に迎え、「石造物の宝庫」といわれる大分県の石造物の魅力と特質に迫った。



④ 埋文講演会 4

「夢とロマンを追いかけて」

平成29年11月19日（日）

大分県立図書館視聴覚ホール 参加者83名

弥生時代の北部九州をテーマとした講演会を開催した。吉野ヶ里遺跡で発掘調査を指揮した佐賀県立佐賀城本丸歴史館の七田館長を講師に迎え、弥生時代のクニや時代像について話をいただいた。

夢とロマンを追いかけて



⑤ 埋文講演会 5

「話題の資料展を語る」

平成29年12月10日（日）

第2講座室 参加者60名

企画展「話題の資料展」に関連し、別府大学の下村教授を講師に迎え、大分県で初の出土例である弥生人が土器に描いた「鹿」の話を中心に、弥生時代の祭祀についての話をいただいた。



(2) 特別講座

児童・生徒を対象とした講座で、考古資料に直接触れながら考古学について学ぶことで、考古学や郷土の歴史に興味を持ってもらうことを目的に年2回開催した。

① 特別講座 1

「集まれ！考古学男子・女子」

平成29年7月30日（日）

第2講座室・豊の国考古館ほか 参加者40名

古墳時代の銅鏡の製作方法について実際に出土した鏡を間近で観察しながら勉強した後、チョコレートを使った鏡の製作体験にチャレンジした。



② 特別講座 2

「古代人のワザを学ぶ！」

平成30年1月21日（日）

第1講座室・歴史体験学習館ほか 参加者34名

古代の瓦の製作方法などについて実際に出土した瓦を間近で観察しながら勉強した。そしてシリコン型に溶かしたチョコレートを流し込み、ミニ瓦やシカをモチーフにしたバレンタインチョコを作製した。



(3) 考古学講座

埋文センター職員が講師を務める講座を毎月実施し、約50～80名の方が聴講した。特別講座がある月は、それを考古学講座に代えて実施した。

第12表 考古学講座一覧

	期日	演題	講師	会場	参加者
1	6月10日（日）	「ここまでわかった！大友氏遺跡」	上野淳也別府大学准教授	埋文センター 第2講座室	125名
2	7月19日（水）	「大分の古墳について」	服部真和（調査第2課）	埋文センター 第2講座室	82名
3	8月23日（水）	「大分の西南戦争の一コマ」	横澤慈（調査第1課）	埋文センター 第2講座室	72名
4	9月20日（水）	「弥生時代の祭祀土器」	井大樹（調査第2課）	埋文センター 第2講座室	50名
5	10月8日（日）	「すごいぞ！大分の石塔」	狭川真一 元興寺文化財研究所副所長	県立図書館 視聴覚ホール	107名
6	11月19日（日）	「夢とロマンを追いかけて」	七田忠昭 佐賀城本丸歴史館長	県立図書館 視聴覚ホール	83名
7	12月20日（水）	「大分の須恵器について」	小林昭彦（企画普及課）	埋文センター 第2講座室	52名
8	1月17日（水）	「大分の中世城館」	福永素久（企画普及課）	埋文センター 第2講座室	58名
9	2月21日（水）	「縄文時代の石器について」	土谷崇夫（調査第1課）	埋文センター 第2講座室	48名

(4) ボランティア養成講座

埋蔵文化財センターの移転拡充にともない、応募をはじめたボランティアの養成も3年目をむかえ、修了した15名ほどの方が図書整理や歴史体験指導等に活躍いただいている。今年も9回の養成講座を実施し、5名が修了生として運営にご協力いただくこととなった。

第13表 ボランティア養成講座一覧

	期日	研修内容	会場	参加者
1	7月19日(水)	「ボランティア活動について」「勾玉作り」	埋文センター 第2講座室・歴史体験学習館	10名
2	8月23日(水)	「考古学講座受講」「古代機織り体験」	埋文センター 第2講座室・歴史体験学習館	10名
3	9月20日(水)	「考古学講座受講」「犬形土製品作り」	埋文センター 第2講座室・歴史体験学習館	8名
4	10月8日(日)	「埋文講演会受講」	県立図書館視聴覚ホール	10名
5	11月19日(日)	「埋文講演会受講」	県立図書館視聴覚ホール	8名
6	12月20日(水)	「考古学講座受講」「火おこし体験」「組紐体験」	埋文センター 第2講座室・歴史体験学習館	10名
7	1月17日(水)	「考古学講座受講」	埋文センター 第2講座室	10名
8	2月21日(水)	「考古学講座受講」「避難訓練」	埋文センター 第2講座室・歴史体験学習館	7名

IV 連携の強化(学校・地域等)

(1) 学校との連携

小中学校の社会科見学や修学旅行、大学の授業で当センターを多く活用いただいた。また、中学校の職場体験や大学生のインターンシップ等将来の進路に関する生徒・学生の受入れも行った。

① 職場体験・インターンシップ受入れ

職場体験として大分市内中学校5校、県立支援学校の生徒1名の受入れを行った。また、県庁でのインターンシップの一環で、当センターでも2名の大学生の研修を実施した。

第14表 職場体験・インターンシップ受入れ一覧

項目	期日	学校名等	参加者
1 職場体験	6月20日～22日	大分市立城東中学校	4名
2 職場体験	7月4日～6日	大分県立大分豊府中学校	4名
3 職場体験	9月5日～7日	大分市立城南中学校	4名
4 職場体験	9月6日～7日	大分市立滝尾中学校	6名
5 職場体験	10月13日～14日	大分市立大東中学校	4名
6 職場体験	1月22日～26日	大分県立別府支援学校	1名
7 インターンシップ	8月21日～25日	熊本大学	1名
8 インターンシップ	8月21日～25日	APUアジア太平洋大学	1名

② 授業・社会科見学・修学旅行等の受入れ

2大学が授業の中で当センターを活用した。また、支援学校の出前授業に職員を派遣した。そのほか9校が社会科見学で見学や歴史体験を行った。また、佐伯の中学校が関西方面への修学旅行の帰り道に見学で立ち寄った。

第15表 授業・社会科見学・修学旅行等受入れ一覧

項目	期日	学校名等	参加者
1 授業	7月7日	別府大学史学科	12名
2 授業	7月18日	別府大学史学科	7名
3 授業	12月1日	大分県立芸術文化短期大学	19名
4 授業	12月17日	別府大学史学科	20名
5 出前授業	10月20日	大分県立別府支援学校	10名
6 社会科見学	5月26日	私立岩田高校1年	122名
7 社会科見学	6月14日	大分市立大道小学校6年	80名
8 社会科見学	6月15日	津久見市立聖徳小学校5・6年	21名
9 社会科見学	10月10日	臼杵市立臼杵南小学校6年	18名
10 社会科見学	10月27日	別府市立大平山小学校6年	71名
11 社会科見学	10月27日	大分市立丹生小学校5・6年	50名
12 社会科見学	11月2日	大分市立金池小学校1・2年	308名
13 社会科見学	11月10日	津久見市立千怒小学校5・6年	64名
14 社会科見学	12月4日	豊後大野市立千歳中学校2年	20名
15 修学旅行	9月15日	佐伯市立佐伯鶴谷中学校2年	168名

③ その他教育関係団体等の受入れ

小・中学校教員の団体が見学・歴史体験で活用していただいた。そのほか県教育センターの実施する教員新採用研修や社会教育課の支援者研修会、高校教育課のふるさと「しごと」フォーラムの講師を務めた。

第16表 その他教育団体等の受入れ一覧

項目	期日	学校名等	参加者
1 学校関係団体	5月12日	大分市小学校社会科部会	62名
2 学校関係団体	7月27日	大分市立津留小学校教員	8名
3 学校関係団体	8月28日	大分市中教研社会科部会（大分西部）	50名
4 学校関係団体	12月1日	大分市中教研社会科部会（大分東部）	40名
5 教員初任者研修	11月9日	小学校・特別支援新採用教員対象の研修	120名
6 ふるさと「しごと」フォーラム	8月1日	高校生を対象とした「おおいを創るキャリア教育推進事業」	7名
7 社会教育支援者研修会	10月3日	ポスターセッション（大分県教育会館）	120名
8 歴史学習体験キット	4月～3月	埋蔵文化財センター所蔵資料から各時代の特徴的な遺物を選出し、学校教育で利用できる学習キットを作成のうえ、貸出しを行う。	

(2) 地域との連携

文化財保護団体や社会教育団体等の展示見学、歴史体験等の申込みが30団体ほどあり、その受入れを行った。また社会教育団体等から研修会での講師の要請があり、職員を派遣した。

① 各種団体の展示見学・歴史体験等での受入れ

展示見学の申込みが30団体ほどあり、そのうちボーイスカウトや文化財愛護少年団、婦人学級等17団体が歴史体験メニューを実施している。

第17表 各種団体受入れ一覧

項目	期日	学校名等	参加者
1 見学	6月4日	国東市下原地区	40名
2 見学・歴史体験	6月4日	ボーイスカウト大分1団	14名
3 見学	6月8日	鶴崎ふるさと歴史教室	40名
4 見学	6月8日	国東市歴史体験学習館ボランティア	10名
5 見学	6月22日	朝地史談会	10名
6 見学・歴史体験	7月23日	宇佐市教育委員会	30名
7 見学	7月24日	大分県文化財愛護少年団	15名
8 見学・歴史体験	8月18日	大分県文化財愛護少年団	100名
9 見学・歴史体験	8月22日	天心堂学童保育	40名
10 見学・歴史体験	8月22日	学童アスラン	34名
11 見学・歴史体験	8月23日	天心堂こども発達支援センター	16名
12 見学	10月13日	日田考古学会	25名
13 見学	10月20日	九州博物館協議会	20名
14 見学	10月22日	退職県議会議員連盟	12名
15 見学・歴史体験	11月7日	滝尾公民館アイビー女性婦人学級	20名
16 見学	11月14日	別府サザンクロス	40名
17 見学	11月26日	別府史談会	30名
18 見学・歴史体験	11月27日	長浜校区銀杏家庭学級	14名
19 見学	11月29日	日出町致道館塾	16名
20 見学	12月17日	大分学	20名
21 見学・歴史体験	12月26日	四日市児童クラブ	65名
22 見学	1月6日	北部九州中近世城郭研究会	8名
23 見学	1月21日	北部九州中近世城郭研究会	80名
24 見学	1月28日	九州前方後円墳研究会	5名
25 見学・歴史体験	2月8日	手話サークルはぐるまの会	44名
26 見学	3月22日	亀城大学友愛クラブ	70名
27 見学	3月24日	自立支援大分	5名
28 見学・歴史体験	3月25日	ふれあいサロン	10名
29 見学	3月29日	古代史の会	5名
30 見学	3月27日	佐伯史談会	10名

② 研修会等への講師派遣

各市町村にある歴史団体・公民館等の依頼を受けての歴史に関する講演や地域の子どもたちを対象に火おこしや勾玉作り等の歴史体験メニューを実施した。

第18表 研修会・講師派遣等一覧

項目	期日	学校名等	会場	参加者
1 大分海と日本プロジェクト	8月23日	小学校高学年を対象とした中世大友氏府内町跡出土の海に関する遺物の説明（TOSテレビ大分主催）	埋蔵文化財センター	20名
2 別府の歴史について	6月7日	別府史談会主催の歴史講座	別府市中央公民館	30名
3 大分の古代寺院と瓦	6月9日	古代史の会主催の歴史講座	コンパルホール視聴覚室	30名
4 大分の古墳について	8月5日	坂ノ市歴史会主催の歴史講座	大分市海部古墳資料館	30名
5 歴史体験	7月28日	大分市東部公民館主催の講座	大分市東部公民館	27名
6 歴史体験	10月14日	九重青少年の家主催の講座	九重青少年の家	30名
7 大分の考古学について	11月7日～11月10日	シルバー人材センター主催の歴史講座	大分市	25名
8 埴輪について	12月12日	古代史の会主催の歴史講座	コンパルホール視聴覚室	30名
9 大分の考古学について	12月12日～12月15日	シルバー人材センター主催の歴史講座	別府市	25名
10 四日市遺跡について	2月17日	くすまち公民館フェスティバル公開講座	くすまちメルサンホール視聴覚室	90名



リニューアルのポスター



昔の国考古館の見学のおしり



考古学マスターのパスポート



来館 5,000 人記念写真



来館 20,000 人記念写真



BVNGO大友資料館



豊の国考古館 シアター



考古学講座



高校生を対象とした講演会



宇佐市の小学生団体



大学生のインターンシップ



中学生の職場体験

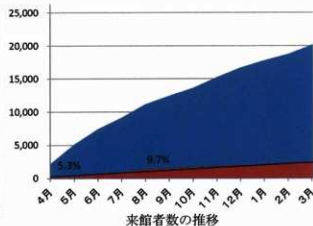
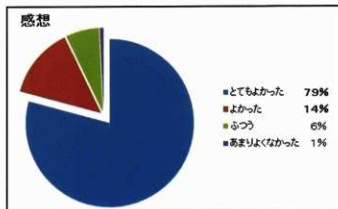
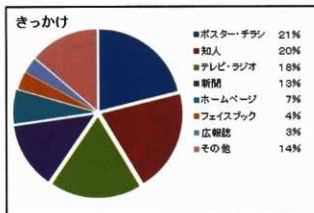
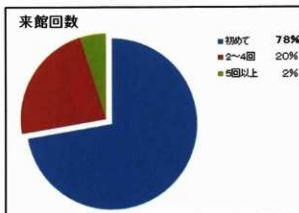
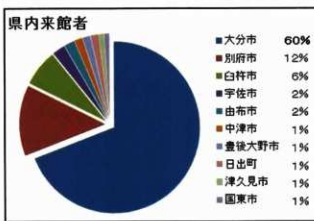
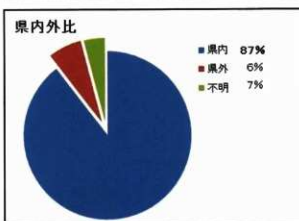
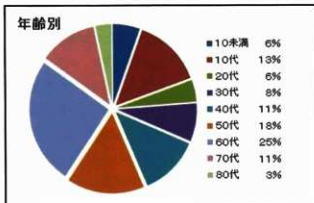
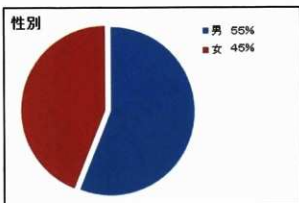


歴史体験指導を行う埋文ボランティア

平成29年度 来館者アンケート結果

対象期間 平成29年4月22日～平成30年3月31日

来館者 20,121人 回答者 285人 回答率 1.4%



埋蔵文化財センター要覧

1 沿革

- 昭和45年(1970)4月 社会教育課内に文化係設置
- 昭和46年(1971)4月 文化室(文化財係)設置
- 昭和47年(1972)4月 文化課設置
- 昭和53年(1978)6月 大分市舞鶴町に埋蔵文化財資料保管・整理用の作業所設置
- 昭和56年(1981)4月 文化課に埋蔵文化財係設置
- 昭和62年(1987)4月 埋蔵文化財第一係・埋蔵文化財第二係の2係体制
- 平成 9年(1997)4月 舞鶴町の作業所を大分市中判田の工業試験場跡に移転
- 平成16年(2004)4月 教育庁埋蔵文化財センター設置
総務課・調査第一課・調査第二課の3課体制
- 平成21年(2009)4月 管理予算班・一般事業班・大型事業班・受託事業班・資料管理班の5班体制
- 平成26年(2014)4月 管理予算班・県事業班・受託事業班・資料管理班の4班体制
- 平成27年(2015)8月 旧芸術会館跡地への移転が正式決定
- 平成29年(2017)2月 旧芸術会館にて業務開始
- 平成29年(2017)4月 大分県立埋蔵文化財センター発足
総務課・企画調査課・調査第一課・調査第二課の4課体制

2 施設の概要

- (1)施設の場所 大分市牧緑町1-61
- (2)規模 敷地面積 18,924.64㎡
建築面積 4,345.37㎡
延べ床面積 7,301.98㎡
- (3)主な施設
- ① 管理棟(1,404.9㎡) 昭和52年(1977)築、鉄骨鉄筋コンクリート3階建
所長室・事務室・第2講座室・入札室・会議室
 - ② 展示棟(3,108.35㎡) 昭和52年(1977)築、鉄骨鉄筋コンクリート2階建
豊の国考古館(459.25㎡)
BVNGO大友資料館(599.80㎡)
考古情報室・第1講座室(174.96㎡)
 - ③ 整理収蔵棟(2,629.79㎡) 昭和52年(1977)築、鉄骨鉄筋鉄板3階建
整理作業室・一時保管室・写場・収蔵庫
 - ④ 歴史体験学習館(158.94㎡) 昭和52年(1977)築、鉄骨鉄筋コンクリート1階建

4 管理規則・利用規則

(1) 大分県立埋蔵文化財センター管理規則

平成二十九年四月一日

大分県教育委員会規則第九号

大分県立埋蔵文化財センター管理規則をここに公布する。

大分県立埋蔵文化財センター管理規則

(趣旨)

第一条 この規則は、大分県立埋蔵文化財センターの設置及び管理に関する条例(平成二十八年大分県条例第四十五号)第六条の規定に基づき、大分県立埋蔵文化財センター(以下「センター」という。)の組織、運営その他必要な事項を定めるものとする。

(課の設置)

第二条 センターに、総務課、企画普及課、調査第一課及び調査第二課を置く。

(総務課の分掌事務)

第三条 総務課においては、次に掲げる事務をつかさどる。

- 一 公印の管守に関すること。
- 二 文書の收受、発送、編集及び保存に関すること。
- 三 職員の身分、服務、研修及び福利厚生に関すること。
- 四 予算の執行並びに現金、有価証券及び物品の出納命令に関すること。
- 五 関係行政機関及び関係団体との連絡調整に関すること。
- 六 施設及び設備の維持管理に関すること。
- 七 施設及び設備の利用に関すること。
- 八 その他他課の所掌に属さない事項に関すること。

(企画普及課の分掌事務)

第四条 企画普及課においては、次に掲げる事務をつかさどる。

- 一 出土品その他埋蔵文化財に関する資料の保存及び展示並びに体験学習の実施に関すること。
- 二 歴史及び考古についての講演会、講習会等の開催に関すること。
- 三 県民の歴史及び考古に関する調査研究活動を援助すること。
- 四 学校、図書館、研究所、博物館、資料館、公民館等の諸施設に対する歴史及び考古についての協力及び活動の援助に関すること。
- 五 埋蔵文化財についての目録、年報、案内書、図録、調査研究の報告書等の刊行に関すること。

(調査第一課の分掌事務)

第五条 調査第一課においては、次に掲げる事務をつかさどる。

- 一 県が行う開発事業に係る埋蔵文化財保護のための調整に関すること。
- 二 県が行う開発事業に係る埋蔵文化財の調査研究の実施に関すること。
- 三 県が行う開発事業に係る埋蔵文化財の調査研究の報告書を作成すること。

(調査第二課の分掌事務)

第六条 調査第二課においては、次に掲げる事務をつかさどる。

- 一 国等が行う開発事業に係る埋蔵文化財保護のための調整に関すること。
- 二 国等が行う開発事業に係る埋蔵文化財の調査研究の実施に関すること。
- 三 国等が行う開発事業に係る埋蔵文化財の調査研究の報告書を作成すること。

(職員の職)

第七条 センターの職員の職として、次の職を置く。

- 一 所長
- 二 副所長
- 三 参事
- 四 課長
- 五 課長補佐
- 六 主幹
- 七 副主幹
- 八 主査
- 九 専門員
- 十 主任
- 十一 主事
- 12 所長の職は、非常勤とすることができる。
- 13 所長は、上司の命を受け、センターの事務を掌理し、所属職員を指揮監督する。
- 14 副所長は、所長を補佐し、センターの事務を処理する。
- 15 参事は、上司の命を受け、専門的事項の指導及び助言に関する事務並びに特定の事務を処理する。
- 16 課長は、上司の命を受け、課の事務を処理する。
- 17 課長補佐は、上司の命を受け、課の事務を処理する。
- 18 主幹は、上司の命を受け、特定の事務を処理する。
- 19 副主幹は、上司の命を受け、特定の事務を処理する。
- 20 主査は、上司の命を受け、事務を処理する。
- 21 専門員は、上司の命を受け、事務を処理する。
- 22 主任は、上司の命を受け、事務に従事する。
- 23 主事は、上司の命を受け、事務に従事する。

(職員の数)

第八条 センターの職員の数は、教育長が定める。

(委任)

第九条 この規則に定めるもののほか、センターの管理に関し必要な事項は、教育長が別に定める。

附 則

この規則は、公布の日から施行する。

(2)大分県立埋蔵文化財センター利用規則

平成二十九年四月一日
大分県教育委員会規則第十号

大分県立埋蔵文化財センター利用規則をここに公布する。
大分県立埋蔵文化財センター利用規則

附 則
この規則は、公布の日から施行する。

(趣旨)

第一条 この規則は、大分県立埋蔵文化財センターの設置及び管理に関する条例(平成二十八年大分県条例第四十五号)第六条の規定に基づき、大分県立埋蔵文化財センター(以下「センター」という。)の利用に関し、必要な事項を定めるものとする。

(利用時間)

第二条 センターの利用時間は、午前九時から午後五時までとする。ただし、入館は午後四時三十分までとする。

2 大分県教育委員会(以下「教育委員会」という。)が、特に必要があると認めるときは、臨時に前項の利用時間を変更することができる。

(休館日)

第三条 センターの休館日は、次のとおりとする。

一 月曜日(その日が国民の祝日に関する法律(昭和二十三年法律第七十八号)に規定する休日(以下単に「休日」という。)に当たるときは、その日後において、その日に最も近い休日でない日)

二 十二月二十八日から翌年の一月四日まで(前号に掲げる日を除く。)

2 教育委員会が特に必要があると認めるときは、前項の休館日を変更し、又は臨時に休館日を定めることができる。

(利用制限等)

第四条 所長は、利用者が次の各号のいずれかに該当し、又は該当するおそれがある場合は、その入館を拒否し、若しくは退館を命じ、又は利用を制限し、若しくは利用を停止させることができる。

一 出土品その他埋蔵文化財に関する資料(以下「資料」という。)並びにセンターの施設及び設備を故意に亡失し、汚損し、若しくは毀損し、又はそのおそれがあると認められるとき。

二 資料の返納を故意に怠ったとき。

三 定められた場所以外で喫煙又は飲食したとき。

四 めいていし、大声を発し、若しくは危険物を持ち込む等他の利用者に迷惑を及ぼし、又はそのおそれがあると認められるとき。

五 その他管理上支障があると認めるとき。

(資料の館外貸出し)

第五条 資料は、館外貸出しを行わないものとする。ただし、所長が特に必要があると認めた場合については、この限りではない。

(委任)

第六条 この規則に定めるもののほか、センターの利用に関し必要な事項は、所長が別に定める。

大分の考古学史 Ⅰ その調査と保存の歩み

宮内克己

土地などに埋蔵されている文化財を埋蔵文化財(考古資料)と言う。それは、貝塚・古墳・集落跡など人の生活や行為の痕跡である遺跡、土器・石器・鉄器・青銅器など人が造った移動可能な遺物、堅穴建物跡・古墳・井戸など移動不能な遺構からなる。これらの埋蔵文化財は、我が国の各地域に普遍的に存在する豊かで生き生きとした歴史的財産であり、地域の歴史を目に見える形で示してくれる大切な資料と言える。そして、大分県においても旧石器時代から近世に至る多種多様で優れた埋蔵文化財の存在が数多く確認されている。ここで、県下の埋蔵文化財の調査研究・保存の歩みを時代を追って見てみよう。

一 近代学問以前・江戸時代の文化財保存記録

大分市大字上野の台地に所在する大臣塚古墳の頂部に板碑状をなす安山岩製の石碑がある。高さ一・八メートル、幅一メートル、厚さ〇・二メートルを測り石碑の上部は丸くすぼまる。上部中央を円形に陽刻し、その内部に勢至菩薩の梵字(サーク)を刻む。石碑の表裏に銘文が記されているが、表面は風雨のため摩滅しており文字はほとんど読めない。裏面の文字の大半は判読可能であり、当時の府内藩主であった日根野吉明(一五八七〜一六五六)が寛永十三年(一六三六)に造立した文化財保存の石碑であることを記す。

これは、寛永十五年(一六三八)に武藏国(埼玉県)川越の喜多院の前に位置する前方後円墳に宝塔を建設する際、玉類や太刀などが出土し塔の完成後に再び埋め戻したという記録や、水戸光圀が我が国で初めて古墳(栃木県上野原・下侍塚古墳)を発掘し、出土品を記録した後埋め戻した元禄五年(一六九二)を遡

る最古の文化財保存の事例と思われる。

寛永十一年(一六三四)、下野国壬生城主であった日根野吉明は日光東照宮の造営に尽力したことなどにより豊後の府内藩二万石を所領する。翌年七月、台風により倒れた大臣塚の松三本の植え替え中に発見された石棺から人骨・太刀・甲冑が現れた。これを見た日根野は家臣にその埋め戻しを命じ、この経緯を石碑の裏面に次のように記した。

如碑之銘文此山國人(一)

ゆり若大臣殿つか寛永十二年七月

廿五日依大風塚松吹折(一)我以松三(一本)

時骸骨太刀甲冑如現在為(歴)(然)(如)

旧蔵之為末世銘刻碑石者也

寛永丙子十一月吉日

大将軍源家光公之御世

日根野織部正藤原朝臣吉明謹書

大臣塚古墳は前方部の一部を失うため全長は不明であるが、後円部の直径は約二十五メートルを測る。その被葬者を伝説のゆり若大臣としているが、甲冑などの鉄器の存在や採集されている円筒埴輪な



大臣塚古墳の石碑裏面



大臣塚古墳の石碑

どから古墳時代中期五世紀中頃の築造と考えられる。そして、人骨・太刀・甲冑を未来の為に旧蔵したと記していることは、文化財は貴重な歴史的財産であり公共のために永く保存すべきとする現在の文化財保護法の精神にまさしく合致するものであり非常に高く評価されよう。さらに、勢至菩薩の梵字が単独で石碑に刻まれた例はほとんど知られないが、勢至菩薩は知恵により衆生を救済するとされることから、日根野はあえてこの梵字を選んだのではないかと考えられる。

日根野は入府の後、金剛宝戒寺・円寿寺・作原八幡宮・春日神社など領内の寺社仏閣の復興、初瀬井路の築造、「浜の市」の開始など幅広い施策により領民に慕われていた。死後は円寿寺に葬られたが幕府に世継ぎが認められず断絶となった。なお、本例のような板碑状をなす石碑も他に類例は知られないが、この後も現在に至るまで住民により大切に保護されていることも注目されよう。

これに続く出土文化財の保存に岡藩主の事例がある。宝暦八年（一七五八）、岡藩八代藩主中川久貞は領内原尻村（豊後大野市緒方町大字上自在）で出土した銅製経筒に刻まれた「永久参年次乙未四月十八日 鑄師橋は貞 願主僧定与 為父母孝養 修如法経願主」の銘文の中で「為父母孝養」に強い感銘を受け、その意義を領民に普及させることを目的に、翌年同村三宮八幡神社境内に経筒を記した顕彰碑「古器をうずむる碑」を建て、経筒を出土地に埋め戻した。さらに、天明四年（一七八四）に出土した大行事八幡社（豊後大野市緒方町大字大化）の



鑑堂古墳出土銅鏡



三宮神社経筒



古器をうずむる碑



後藤伊賀守碑銘始末

経筒についても同様の顕彰碑を境内に建てている。これに加え文政十年（一八二七）には十一代藩主中川久教により、原尻村で出土した二字一石経を久貞に習い埋め戻したとする「小白石をうずむる碑」が三宮神社境内に並んで建てられた。このような文化財保存の背景には、岡藩が享保十一年（一七二六）に県下最古の藩校を設立し学問と教育の発展を図るだけでなく、幕府から『豊後国志』の編纂を命じられるなど高い文化的風土を保有してたことが考えられよう。

幕末に日出藩の家老を務めた帆足万理（一七七八〜一八五三）は、自然科学者・儒学者・医学者としても第一流の学者であった。帆足は別府市大字北石垣に所在する鬼の岩屋一・二号墳の調査を行い、これらの古墳は鬼の棲家などではなく、大勢の人々によつて造られた古代の有力者の墓と考えられることを享和三年（一八〇三）刊行の『肄業余稿』で述べており注目される。

儒学者・教育者として広くその名を知られる日田の広瀬淡窓（一七八二〜一八六八）は文政七年（一八二四）、豊後高田市の住民が持参した古鏡（鑑堂古墳出土）の銘文を読み解き、中国製の鏡で八〜九百年前と推定しており、県下で最初に銅鏡の銘文を解説し製作年代にもふれた優れた学者であったことを示している。

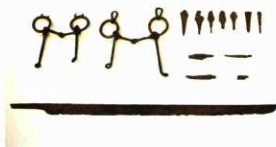
天保二年（一八三一）、県下最古の文化財発見届が岡藩に提出された。この類末は「天保二年 後藤伊賀守碑銘始末」「羽田野家文書」に詳しく記されている。同年の八月、岡藩上自在組原尻村（豊後大野市緒方町大字原尻）の佐右衛門が

農作業中に横穴（六箱横穴墓）を発見し、中から太刀・轡・鎌・刀子などの鉄器が出土した。同月末に上自在村大庄屋森市郎兵衛と原尻村小庄屋吉郎助により出土品の届けが藩に提出された。そして、翌年五月にこれらの遺物は先祖である後藤伊賀守が所持したもので、出土品を子孫により大切に保管したい旨の調査が提出された。岡藩は調査を行った後にこれを後藤伊賀守のものと認め返還し、先祖の遺品を大切にすることをほめ、佐右衛門に褒美として米一俵を授けた。佐右衛門や吉郎助など一族は、藩校由学館の松岡氏にその経緯を文章にしてもらい、「後藤伊賀守貞宗碑」を天保四年（一八三三）に建立した。

石碑は凝灰岩製で、後藤伊賀守の墓碑と並んで緒方盆地西部を見下ろす丘陵の頂部近くに建てられている。横穴墓もこの近辺に存在する可能性が高く、その被葬者は古墳時代後期の当地域の有力者に想定されよう。そして、文書と出土品は一族代表の庄屋家により現在に至るまで朽ちることなく当時のまま連絡と受け継がれている。後藤伊賀守は、文禄年間（一五九二〜九六）に当地に到来したとされる人物で古墳時代後期（六世紀代）に置かれる出土品とは明らかに時期が異なるが、顕彰碑を建て記録と共に出土品が保管されていることは、文化財保存の貴重な先駆例であり、かつ全国的に見ても他に例のない事例と言えよう。

二 近代考古学の導入・幕末〜戦前の調査

帆足万里に師事した後藤碩田（一八〇五〜一八八二）は、幕末から明治にかけて果下の古物・考古資料を調査・記録し、豊後の博学として知られる人物である。



六箱横穴墓出土鉄器

碩田は、先に述べた六箱横穴墓出土の各種鉄器や大行事八幡の経筒を始め、大分市佐賀岡町の猫塚古墳出土の鍬形石や同市鍋山山谷遺跡の銅矛・銅七など現在では所在不明の貴重な考古資料の精密な模写を残している（『尚古延寿』）。これらを精選したものが明治四十四年（一九一）に日名子太郎により『大化帖』として刊行され、そこに掲載された六箱横穴墓出土の鉄器類が現在と全く変わらないことなど貴重な情報が多く含まれている。

明治時代に考古学者として活躍した東京大学の若林勝邦は、大分県下の調査を行い明治三十年（一八九七）の『考古学雑誌』第八・九号に発表した。これは、銅剣・石人・石器時代遺跡の最初の報告であり、これを前後して大分県内の考古学研究者・同好者が増加し調査が進展していった。その代表に、河野清寅・日名子太郎・久多羅木儀一郎・佐藤蔵太郎・十時英司、富田源太・広瀬幸吉・弘津史文・本莊昇・南善吉などの人々の名が挙げられる。



灰土山古墳調査記録



大化帖六箱横穴出土鉄器



大化帖下巻

大正三年（一九一四）、河野清實は宮内省の命を受け灰土山古墳（杵築市大田）の主体部の発掘調査を行った。これが県下において最初の発掘調査となるものであり、翌年には人骨調査を担当した財前克己とともに『考古学雑誌』第五卷第十一号に「豊後西国東郡田原村灰土山古墳の調査」として報告がなされた。古墳は直径約七・二メートルの円墳で、扁平な安山岩の板石を組み合わせた箱式石棺を主体部とする。石棺は内法で長さ二・三四メートル、幅〇・四五メートルを測り、床面にも板石を敷く丁寧な造りである。内部から人骨二体が検出され成人男性が初葬で熟年女性を追葬されたことが判明した。四獣鏡・珠文鏡・管玉・丸玉・刀子などが副葬され、これらから四世紀後半の時期に置かれる。報告では人骨や副葬品の出土状況を示す実測図や鏡二面の拓本なども記載されており、この時期の調査報告としては非常に高いレベルにある。また出土遺物は東京国立博物館に保管されているが、報告の原稿類は河野氏の孫より現在に至るまで大切に受け継がれている。

大正八年（一九一九）、宮内省は延喜式式内社における古墳の調査を開始し、県内では大分郡長が大分市賀来の丑殿神社古墳について回答している。これを機に陵墓を始めた古墳の調査機運が高まり、「史蹟名勝天然記念物保存法」が制定され、大正十年（一九二二）には「大分県史蹟名勝天然記念物調査会」が組織されると共に文化財の組織的調査が開始され、調査員には先に挙げた河野清實などの研究者・同好者が任命された。その結果を記した『大分県史蹟名勝天然記念物調査報告書』は大正十一年（一九二二）から昭和十三年（一九三八）にかけて計十八編が刊行され、大分市千代丸古墳・丑殿古墳・築山古墳、臼杵市臼塚古墳、豊後大野市大塚古墳・赤嶽古墳・重政古墳、杵築市本荘古墳、宇佐市赤塚古墳・葛原古墳など、県内の主要な古



『大分県史蹟名勝天然記念物調査報告書』



赤塚古墳出土銅鏡



赤塚古墳全景

墳の調査がなされ、古墳に関する強い関心が読み取れる。この中で昭和二年（一九二七）に佐藤蔵太郎により調査された臼塚古墳は、男二体がそれぞれ葬られた大小二基の舟形石棺を主体部とする全長八十七メートルの方後円墳で、大型の石棺からは位至三公鏡・獸帯鏡・イモ貝製貝輪・ゴホウラ貝製貝輪・太刀・勾玉・管玉などの副葬品が出土しており被葬者は海部の首長とその近親者であったことを示す（賀川光夫 一九四八）。その築造年代は五世紀初頃に置かれ、くびれ部に置かれた二基の石甲はその希少性と重要性から国重要文化財に指定された。

京都大学の梅原末治は大正十二年（一九二二）、「豊前宇佐郡赤塚古墳調査報告」『考古学雑誌』第十四卷三号）において、赤塚古墳出土の銅鏡五面と石棺の聞き取り調査の結果を報告した。鏡は四面が三角縁神獸鏡で一面が三角縁盤龍鏡ですべて中国製とされるもので、その数は現在でも九州二位の枚数である。この種の三角縁神獸鏡は時の畿内政權と密接な関係なくしては保有し得ない遺物であり、五面の鏡は赤塚古墳の被葬者が畿内政權と同盟関係にあったことを示していると言え

よう。なお、昭和五十六年（一九八一）に行われた「宇佐風土記の丘」開設に伴う確認調査により赤塚古墳の西側から南側には古墳時代前期～中期の集団墓である方形周溝墓群十八基が展開することが判明し、首長単独ではなくその所属集団も含む造墓活動であることを示す。

大正十二（一九二二）～十四年（一九二五）、京都大学の浜田耕作が主導し臼杵市臼杵磨崖仏、大分市元町石仏・高瀬石仏、豊後大野市普尾石仏など県内の石仏の調査が行われた。その内容は豊後における各石仏の製作者と製作年代の検討、石仏の様式及び文献資料の調査など考古学と美術史学を統合した研究であり、新しい歴史考古学の道を拓くものであった（浜田耕作『豊後磨崖仏の研究』京都帝国大学考古学研究報告 第九冊 大正十四年）。

昭和六年（一九三一）、県下初の貝塚調査となる豊後高田市森貝塚の調査が行われ樋口清之によって報告がなされた（大分県西国東郡河内村森貝塚の研究『史前学雑誌』第三巻一号）。貝塚は桂川の下流左岸、標高二十五～三十メートルの低丘陵の東側斜面に位置し、貝層は厚い所で約一メートルを測る。内湾砂泥性の貝類が主体を占め縄文時代後期前葉から中葉の所産であるが、貝層の範囲は約三百平方メートルに及ぶと推定され県内でも大規模な貝塚の一つである。さらに、桂川や寄藤川の河口周辺の貝塚の分布から、当時の海岸線の復元を行った点は大いに注目される。

その後、遺跡や古墳などの文化財の調査活動は昭和十三年（一九三八）までは継続されたが、戦いが激しくなるに従い中断しその復活は戦後になってからとなる。

三 大学等による調査・戦後～昭和四十五年

第二次世界大戦が終わるとそれまでの皇国史観が取り払われ、昭和二十二年（一九四七）の登呂遺跡（静岡県）の調査を皮切りに全国各地で埋蔵文化財の発掘調査と研究が再開されていた。大分県では、昭和二十三年（一九四八）に佐伯市下城・長良貝塚の発掘調査が別府大学の賀川光夫と九州大学の鏡山猛を中心に実施され

た。これにより貝塚や竪穴建物が出土され、出土土器は弥生時代の前期末から中期の県下を代表する下城式として設定された。下城式土器は口縁部の下に刻目突帯文を巡らす壺と胴部に沈線による区画や半円文を施す壺から構成され、日田・玖珠地域を除く県下の広い範囲に分布する。この調査以後、県内の主要な発掘調査は賀川・鏡山のほか、九州大学の小田富士夫や県文化財専門委員の入江英親などの人々により実施されたが、その中心は大分県考古学の父と言われ、生涯に渡り遺跡の調査と保存に力を尽くした別府大学の賀川光夫であった。

昭和二十四年（一九四九）～二十七年（一九五二）にかけて、大分県教育委員会と九州文化総合研究所による国東市国東町安国寺遺跡の発掘調査が行われた。田深川右岸の沖積地（標高約十メートル）に立地し、舌状に張り出す微高地からは高床建物と想定される柱穴群が検出され、屈曲して流れる自然溝からは平鉄ナスピ形鉄・石斧柄などの木器に加え、多量の高倉などの建物を構成する建築材と土器が出土した。この調査は「西の登呂」として大きく報道されると共に戦後の暗い世相に明るい話題を提供した。また、口縁部に櫛描波状文を施す壺形土器は賀川により弥生時代後期から古墳時代前期前半の



五 上) 安国寺遺跡出土平鉄、ナスピ形鉄 左) 建築部材 中) 弥生時代後期土器 右) 整備された安国寺集落遺跡

大分を代表する安国寺式土器と命名され標識資料となった。

その後、昭和六十年（一九八五）～六十二年（一九八七）に遺跡の保存整備を目的とした発掘調査が行われた。その結果、多量の建築部材や各種木製品が再び出土し、自然流路の全形も把握された。これを受け平成四年（一九九二）に調査区とその周辺は国史跡に指定され、史跡整備事業により「安国寺集落遺跡」として整備・公開されている。また、隣接する国東市歴史体験学習館では出土土器の展示や土器造りなど各種の体験学習の場も提供している。

昭和二十八（一九五二）・三十八（一九六三）～四十年（一九六五）には、日出町早水台遺跡の発掘調査が実施された。標高約三十五メートルの海岸段丘上に立地し、南北三百メートル、東西百九十メートルの広範囲に及ぶ大規模遺跡である。旧石器時代後期の遺物も出土しているが、中心は縄文時代早期の押型文土器である。押型文土器の中で川原田式に続く早水台式の標識となった遺跡であるが、第三次調査では後期旧石器時代より下層の礫混じり層から石英脈岩や石英粗面岩を石材とする「石器」が多く出土した。これを「石器」と認定する肯定派と加工痕が明確ではないとする否定派の間で前期旧石器論争が起った。現在では石英脈岩と石英粗面岩は自然堆積物とする説が有力であるが、完全には決着していない。

昭和二十九年（一九五四）、大分県を代表する二つの古代寺院の調査が行われた。日本考古学協会による宇佐市虚空蔵寺跡塔跡と大分県教育委員会による宇佐宮跡



早水台遺跡



早水台遺跡出土土器

勒寺の金堂・講堂・東塔跡の調査である。中門と講堂の間の左右に金堂と塔を配する法隆寺式伽藍配置をとる虚空蔵寺跡は、昭和四十四・四五年（一九六九・七〇）には大分県教育委員会による遺跡保存のための調査が実施され、昭和五十七年（一九八二）以降は宇佐市教育委員会による数次にわたる調査が行われている。その結果、寺域

は一辺約百二十メートルの規模を持ち、創建時の軒瓦は法隆寺系、軒平瓦は川原寺系が主体となり、これに少数の新羅系軒平瓦と百濟系軒丸瓦を伴う。塔跡からは九州で唯一の奈良県明日香村の南法華寺と同じ埴仏が出土しており、軒先瓦と共に畿内との強い繋がりが窺われる。また、西側に隣接する丘陵部からは計七基の瓦窯や炭窯一基の存在も確認されている。

この時期に、中央で活躍し優れた医術により朝廷より褒賞された人物に僧「法連」がいる。法連は大正三年（七〇三）に豊前の原野四十町を、養老五年（七二二）には一族に「宇佐君」の姓を賜っており、この法連が大正年間に虚空蔵寺を創建したと考えられている。しかし、その命脈は短く平安時代には廃絶したようである。

宇佐宮跡勒寺は、昭和二十九（一九五四）～三十六年（一九六二）に大分県教育委員会が、昭和五十六（一九八一）～六十三年（一九八八）には大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館による調査が、平成九・十年（一九九七・九八）



虚空蔵寺跡出土軒平・軒丸瓦、埴仏 伽藍配置



には宇佐市教育委員会による調査が実施された宇佐神宮の神宮寺である。神仏習合を具現化した寺の寺域は東西約百五十メートル、南北約二百メートルの規模を有し、南北軸線上に南門・中門・金堂・講堂を配置し、金堂の南側の東西に塔を置く・粟師寺式伽藍配置をとる。奈良時代中頃に完成し、明治の廃仏毀釈まで長期にわたって存続した寺院としても知られる。

創建期の軒丸瓦・軒平瓦は大宰府系であり、宇佐宮と共に国家の援助を受けて建立されたことを物語る。これはこの地で生まれた八幡神が、養老四年（七二〇）の隼人の乱の平定に自ら参加したことに始まる朝廷への接近がその背景にある。そして、神仏習合を唱えると共に聖武天皇の東大寺大仏の完成（天平一七年（七四九））にも大きく寄与したことなどから、現在に至るまで朝廷の厚い信頼を受け、ここに他の古代寺院と大きく異なる特殊性を見ることができよう。

昭和二十九年（一九五四）、賀川を中心に竹田市大字戸上の菅生台地東端部に位置する七ツ森古墳群の調査が行われた。七ツ森古墳群の四基の中で中墳のA号墳と前方後円墳のB号墳の調査であり、A号墳は直径二十メートル、高さ四メートルを測り、割貫式の割竹状石棺を主体部とするが副葬品は無かった。B号墳は全長四十七メートル、後円部の高さ六メートルで、安山岩の板石を組み合わせた箱式石棺を主体部とする。石棺の内法は長さ三メートル、幅〇・七五メートルを測り、人骨二体と玉類・石剣・刀子などの副葬品が検出された。石棺の構造や石剣などから四世紀後半に置かれる。本遺跡の周辺に隣接する小園遺跡や石井入口遺跡などの弥生時代後期から古墳時代前期の集落遺跡と合わせその重要性は高い。

昭和三十七年（一九六二）～三十九年（一九六四）にかけては、日本考古学協会洞穴遺跡特別委員会（賀川などを中心）による県内各地の洞穴遺跡の調査が行



弥勒寺出土軒丸・軒平瓦

われた。佐伯市本匠聖岳洞穴、杵築市山香町川原田洞穴、豊後大野市朝地町大恩寺稲荷岩陰・草木洞穴の調査であり、聖岳洞穴からは後期旧石器に伴うとされる人骨が、他の三つの洞穴からは縄文時代の人骨等が検出されている。なお、聖岳洞穴の人骨はその後の調査により近世の所産と訂正された。川原田洞穴からは、早期の押型文土器に先行する無文土器（川原田Ⅰ式）と、ベルト状施文で最古の押型文土器（川原田Ⅱ式）が層位的に出土し、後続する早水台式や田村式なども含め、押型文土器の変遷が明示された。大恩寺稲荷岩陰からは、早期末頃から前期の屈葬人骨八体が検出された。そして、小兒人骨の土坑には灰が詰められていることや、成人人骨の胸に石を置いた抱石葬、切除した遺体の足先を肋骨内部に挿入したものなど、縄文人の多様な埋葬の一端が明らかになった。

昭和三十六年（一九六一）～四十二年（一九六七）、賀川を主に標高三百六十メートルの台地の中央に立地する豊後大野市精方町大石遺跡の発掘調査が行われた。縄文時代晩期の大石式土器を主体とし、多量の扁平打製石斧・横刃型石器・石鎌状石器に加え磨石・石皿・管玉・勾玉・土偶などが出土した。賀川は、中央の広場を取り囲み平地式住居が展開するとし、広場の北側に検出された直径八メートル・深さ約三メートルの大型円形遺構は集落の集会場ではないかと想定した。さらに、石器に残る使用痕などから扁平打製石斧は土掘り具に、横刃型石器は穂摘具とし、薨棺



大石遺跡近景 縄文時代晩期土器・玉類

葛や玉類など文物的要素も含め、縄文時代晩期の当地域においてアワやヒエなどの原始的な穀物栽培が大陸からの伝播により行われたとする「九州縄文農耕論」を提唱した。

しかしながら、扁平製石斧や横刃型石器は縄文時代後期に東日本から伝播したとする説が有力であり、土器についても大陸からの影響は看取されないことや、内陸部における晩期中葉以降の遺跡の急減、その後の調査においても晩期中頃まではアワやヒエなどの穀物は検出されていないことなどは、農耕の可能性を少なからず否定する要素となる。

一方、土器に残る庄痕研究から後期〜晩期に栽培種と見られる大豆の存在が確認されたことは、今後更なる調査と検討を要するものの、小規模な植物栽培の可能性を窺わせるものとして注目されよう。

県道鶴崎大南線の拡張計画により昭和四十年（一九六五）、賀川を主に確認調査が行われた大分市大字横尾に位置する横尾貝塚では、縄文時代前期の貝層と早期の包含層の存在が確認されていた。その後、昭和五十五・五十六年（一九八〇・八一）に県道改良工事に伴う調査が県教委によつて実施された。弥生時代中期から古墳時代前期の遺物包含層の下に縄文時代後期の竪穴建物と遺物包含層が認められ、その下にハグリを主とする縄文時代中期（船元式土器）の貝層が、この下にヤマシジミを中心とする縄文時代前期（轟式土器）の貝層が堆積し、さらにアカホヤ火山灰を挿み縄文時代早期（押型文土器等）の包含層が検出された。ヤマシジミからハグリへの変化は縄文中期における海面の上昇を示すものとして重要



大石遺跡出土打製石斧・横刃形石器



であり、十七体検出された人骨には魚骨製装身具を保有するものも認められた。

その後、平成十三（二〇〇一）〜十八年（二〇〇六）度到大分市教委により貝塚の範囲確認調査が行われ、縄文時代早期後半とされる土層から姫島産黒曜石の大型原石二点（十・三・グラム、十二・二・グラム）、早期末頃の「足場」遺構とその内部から出土した姫島産黒曜石の剥片六十九点以上が収納された籠入り黒曜石、後期前葉のドングリ（イチイガシ）貯蔵穴の検出など多くの成果が得られ、国史跡に指定された。特に姫島産黒曜石の原石と籠入り黒曜石の出土は、姫島産黒曜石の交易が籠に剥片等を入れ船などを利用して行われたことを如実に物語る希少かつ重要な資料となる。

中津市本耶馬溪町粉洞穴は、屋形川の浸食により形成された間口約十一メートル、奥行九メートルの洞穴で、昭和四十九（一九七四）〜五十七年（一九八二）に別府大学と長崎大学により八次にわたる調査が行われた。縄文時代早期・前期・後期の遺物包含層からは土器・石器に加えイノシシ・シカなどの獣骨、カワナ・ハマグリな



左）横尾遺跡出土カゴ入り黒曜石 右）貝類・獣骨、出土状況、石器

どの貝類、エイ、サバ、アジ、マダイ、スズキなどの魚骨が出土した。さらに早期十一体、前期三十九体・後期十八体の合計六十八体の人骨が検出された。この数は九州最多で未調査の部分を含めると百体以上の縄文人が埋葬された国内有数の遺跡と言える。墓は地面を掘り窪めた土坑墓で、土坑の上面に石を敷き並べた配石墓もある。埋葬には遺体の手足を折り曲げる屈葬と伸展葬の二種が認められるが前者が圧倒的割合を占める。また、母子合葬（五十一・五十一号）や男女合葬（六・六号）、成人男性四体合葬（一〜四号）、遺体切断事例（五十四・五十七号）など縄文人の埋葬儀礼や埋葬観念を窺わせる事例や病変を示す人骨なども出土している。その他、貝製や獣骨製の各種装身具に加え、頭部を除去し開き加工されたと考えられるアジ・サバ類の魚骨の出土、及び七十九点を数えるハダリなどの貝製刃器の存在など、実に豊かで多くの重要な情報をもたらした遺跡でもある。

九重町松木に所在する二日市洞穴では、昭和五十（一九七五）〜五十三（一九七八）に五次にわたる調査が別府大学により行われた。松木川の浸食により形成された開口部幅約六メートル、奥行き約二十メートルの洞穴遺跡である。縄文時代草創期から後期にわたる九層の文化層の中で、下層の第八・九文化層の出土遺物は草創期から早期への移行過程を示す資料として重要性が高い。第八文化層では、平底に近い丸底の条痕文土器を主体に石鏝と槍先形尖頭器が伴う。第九文化層からは平底



二日市洞穴



二日市洞穴出土縄文時代草創期土器

の条痕文土器を中心に石鏝と有舌尖頭器が出土し、両文化層の出土資料は草創期終頃に編年され大分最古の土器群となった。近年、佐伯市森の木遺跡でさらに古い一群の土器が出土し、草創期後半の土器変遷の実態が次第に明らかになりつつある。

四 行政による発掘調査の進展、昭和四十六年〜現在、 一 圃場整備等に伴う調査

昭和四十年代の国による「高度経済成長政策」に伴い、全国各地で大規模開発に伴う発掘調査が急激に進行した。大分県においても昭和四十六年（一九七二）に、増加する県内の各種開発事業に対応するため大分県教育委員会社会教育課に文化財係設置され翌年には文化課となった。同年、宇佐市教育委員会社会教育課にも文化財係が設置され、各々に埋蔵文化財の専門職員が配置された。ここから、教育委員会による遺跡の分布調査と発掘調査が始まり、県教委では高校建設等に伴い宇佐市台ノ原遺跡と大分市雄城台遺跡の調査が、宇佐市教委では法鏡寺廃寺・虚空蔵寺跡・立石貝塚などの発掘調査が実施された。

これと同時に、県北部の十三市町村や大野川流域の遺跡分布調査が行われ、遺跡保護の基礎資料が作成されていった。その結果、大野川中〜上流域の広大な台地上に多数の遺跡が確認され、遺跡の保存と畑地帯改良事業との調整が緊急の課題となった。昭和五十年以降、分布調査結果を基に重点地区である駅館川流域遺跡群と大野川流域遺跡群の確認調査が開始されると、次々に新たな遺跡の存在や遺物が数多く発見された。そして、昭和五十二年（一九七七）には県内遺跡一覽表（千二百五箇所）と分布地図が作成され、その後の遺跡保護の基礎資料となった。大分県遺跡地図は平成四年（一九九二）度、平成十九年（二〇〇七）度、平成二十九年（二〇一七）度にそれぞれ改定版が出され現在では遺跡の数は四百四十余りを数える。

宇佐市大字四日市の台ノ原遺跡は標高五十メートルの台地上に立地し、宇佐地域

の弥生時代を代表する遺跡の一つである。昭和四十五年（一九七〇）～四十七年（一九七二）に高校建設に伴い調査され、弥生時代中期を中心とする円形の竪穴建物四基、貯蔵穴三十数基、土坑墓及び遷棺墓二十六基が確認された。貯蔵穴の多くは円形で断面が袋状をなすもので、弥生前期末頃の短期間に形成されるが同時期の集落の場所・構造等については不明である。中期の集落の実態については不明な点が多いが、二棟前後を単位とする竪穴建物が点在する比較的小規模な集落跡であった可能性が高い。

出土土器は、在地の下城式土器に北部九州系の亀ノ甲土器・城ノ越式土器・須玖式土器が伴うが、前期末以降から北部九州系土器が主体となる。石器には大陸系の石包丁・扁平片刃石斧・柱状片刃石斧・石七・石剣などに加え、打製石鏃・石皿・磨石・敲石など縄文系の石器も少なくない。袋状貯蔵穴からは炭化米が検出されており、石包丁など大陸系磨製石器などと合わせ水稻農耕の定着を明示している。

大分市大字玉沢に所在する雄城台遺跡は標高七十メートルの台地上にあり、高校建設に伴い昭和四十六年（一九七二）から平成六年（一九九四）に至る九次に及ぶ調査が行われた。検出された遺構は、弥生時代前期末から中期と弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の二時期に分けられる。前期末から中期にかけては円形の竪穴建物と貯蔵穴群を主とするが、竪穴建物は散漫な分布を示し比較的小規模な集落跡と見られる。弥生時代後期後半から古墳時代初頃には一時期に数十棟の方形竪穴建物が台地のほぼ全面に展開し、縁辺部には壕溝が巡らされた大規模な集落跡に発達したと考えられている。この時期の注目される出土遺物に鏡片一点



台の原遺跡・川部遺跡 弥生時代前期末～中期初頃の土器

（内行花文鏡・方格規矩鏡）や異下唯一の資料である巴形銅器があり、大分平野の拠点集落の一つとして重要な位置を占めることが明らかとなった。また、大分市大字曲に所在する守岡遺跡も弥生時代終末～古墳時代初頭の有力集落跡の一つとして知られる。

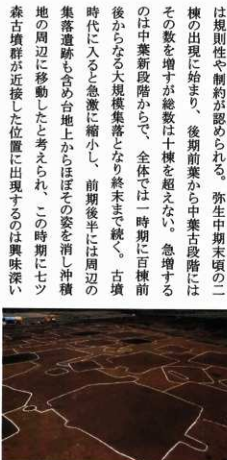


雄城台遺跡出土鏡片・巴形銅器・調査風景

宇佐市の東部を流れる奇藻川の支流である田笛川の上流左岸に所在する立石貝塚は、七箇所の地点に散在する貝層・混貝土層とその周辺に形成された遺物包含層からなり、中央部には帯状の遺物空白地帯が認められることが昭和四十六年（一九七二）に行われた圃場整備に伴う緊急調査により判明した。出土土器は、中津式土器・福田Ⅱ式土器・津雲Ⅰ式土器など瀬戸内系土器と、東九州特有の西和田式土器・小池原式土器・鐘崎式土器・コウゴロ松式土器などであり、後期前葉から中葉の時期を中心に一部晩期の土器を含む。石器には、磨製石斧・石鏃・石匙・彫器・扁平打製石斧・石鏟などが、貝類はウミミナ・ハナタリ・ハグクリ・オキシジミ・マガキなど内湾砂泥性の貝を主とする。魚類ではスズキ・クロダイ・ア

ジ・イワシ類が確認され、内湾の中央部から湾奥部を活動対象とした季節性の強い遺跡と考えられている。

竹田市石井入口遺跡は、昭和五十一（一九七六）～五十六年（一九八一）に畑地帯整備に伴う調査が行われ、縄文時代の遺構・遺物を少数含むがその中心は弥生時代中期後半から古墳時代前期前半の竪穴建物からなる集落跡である。標高約五百十五位の台地上の調査区からは約百八十棟の竪穴建物が検出されているが、調査区外にも展開する可能性が高く全体の総数は九百棟に及ぶと想定されている。内部調査を実施した方形の竪穴建物七十九棟は、激しく重複するが方向や規格には規則性や制約が認められる。弥生中期末頃の二棟の出現に始まり、後期前葉から中葉古段階にはその数を増すが総数は十棟を超えない。急増するのは中葉新段階からで、全体では一時期に百棟前後からなる大規模集落となり終末まで続く。古墳時代に入ると急激に縮小し、前後後半には周辺の集落遺跡も含め台地上からほぼその姿を消し沖積地の周辺に移動したと考えられ、この時期に七ツ森古墳群が近接した位置に出現するのは興味深い。



左) 石井入口遺跡出土土器、銅鏡・ガラス玉、鉄器 右) 遺構検出状況

現象である。

出土土器は、粗製鑿と安国寺式複合口縁壺を主体に鉢と高坏などが加わる構成となる。蒸し器である甗や壺などを乗せる器台が欠落し、在地産の土器は工字状突帯文が施された粗製鑿のみであり、この他の壺・鉢・高坏などは大野川中下流域や肥後など他地域からの移入品により構成される所に大きな特徴がある。鉄器には鉄鎌・鉄斧を主に刀子・鉈・手鎌などが認められ、砥石・磨石・石皿なども少なくない。小形仿製鏡・小形轉鏡・舶載鏡片など注目される青銅器も出土しており、これらの出土遺物から畑作（豆類・穀類）を主にしながらも狩猟・採集にも比重を置いた生業を基盤とした集団の存在が考えられる。弥生時代後期後半にその頂点を迎えたが畑作による経済基盤の脆弱さなどから、台地上に立地する遺跡は古墳時代になると急激に衰退していった。

昭和五十四（一九七九）～平成十二年（二〇〇〇）に農業関連事業や無線基地局建設などにより十一次に及ぶ調査が行われた日田市吹上遺跡は、標高四百四十位の台地上に立地する集落遺跡で



下) 吹上遺跡4号壟墓とその出土遺物



上) 吹上遺跡遺構検出状況

ある。無線基地に伴う6次調査では、台地の東南部の一面から成人用甕棺墓七基・木棺墓三基などが検出された。その中で、中期後半の4号甕棺墓からは右手に十五点のゴボウラ製貝輪が装着された成人男性人骨とともに鉄剣・銅七・硬玉製勾玉各一点、ガラス製管玉五百二十五点が副葬されていた。その東側に隣接する5号甕棺墓からは右手に十二点、左手に五点のイモガイ製貝輪を装着した成人女性人骨と硬玉製勾玉一点の副葬品が出土し大きな注目を集めた。奄美大島以南で産出するゴボウラ貝やイモガイ製の貝輪を多数保有できる人物は首長層に限られるだけでなく、4号甕棺墓の被葬者は銅鏡こそ持たないもののその豊富な副葬品からオウ(王)又はそれに近い首長とみなされ、5号甕棺の女性はその近親者である可能性が高い。その他、中期前半から中頃の1号木棺墓からは、細型銅剣と青銅製把頭飾が、中期後半の2号甕棺墓からは銅七一点が出土しており、本遺跡は首長と集落の選ばれた有力者が葬られた墳墓群と考えられるが、日田地域を除く県内に成人用甕棺墓はほとんど認められず、中期において同様の事例は他に知られない。なお、これらの出土品は重要文化財に指定されている。

昭和五十六年(一九八一)に圃場整備に伴い調査された宇佐市御幡遺跡は、宇佐市を流れる駅館川右岸の河岸段丘に位置し、列状に南北方向に展開する石蓋土坑墓・石棺墓・甕棺墓など約百三十基と、墓前行われた祭祀に用いられた土器を廃棄した祭祀遺構約二十五基からなる弥生時代中期を中心とする集団墓地である。石棺墓は石蓋土坑墓と比べ、より上位の墓と言え



上) 御幡遺跡 下) 御幡遺跡出土祭祀土器

るが、両者は副葬品をほとんど持たないことから、この時期においては集団の構成員に格差はなかったようである。小児用の甕棺墓は赤色顔料を塗布したものが多く、祭祀遺構からは多くの土器が出土し時期差があることから、繰り返しの使用と一族に一つの祭祀遺構が伴うと考えられる。この為、最終の形状は不定形となり同じ形をなすものは認められない。

土器は各種の壺と高坏が主体となり、これらに脚部を付すものも多く存在する。御幡遺跡の北側約五百メートルにある野口遺跡も同時期の集団墓地であるが、ここからは三百基余りの墓と約四十基の祭祀遺構が検出され、より規模の大きな集団(東上田遺跡)による造墓と見られる。そして、駅館川の右岸台地上には弥生時代中期を中心とする複数の集落遺跡とその集団墓地が距離を置きながら展開するが、後期になると衰退していくことも判明している。

国東市国東町の羽田遺跡は、姫島の南約十三*の伊予灘に面した標高五メートルの古砂丘上に立



左) 羽田遺跡出土縄文土器把手蛇頭、硬玉製玉斧、石器類 中) 黒曜石原石 右) 羽田遺跡遺景

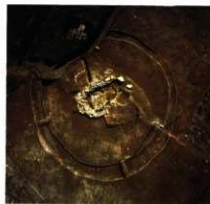
地する遺跡で、昭和六十二年（一九八七）に開場整備事業に伴う発掘調査が行われた。縄文時代前期と後期を中心とする土器に伴い、石鏃・石錐・石匙・掘器等の各種製品や未成品に加え原石・石核・剥片など総重量八十・グラムに及ぶ大量の姫島産黒曜石が出土した。姫島産黒曜石は約三十四万年前に噴出した溶岩が急冷で冷やされることによりできたもので、その露頭は大規模であることなどから国の天然記念物に指定されている。原石は姫島の露頭から直接剥ぎ取られたものが多く、十二・五・グラムと西日本最大を含み、石核も大小約二百点が確認された。姫島で採取した黒曜石をここに船から陸揚げし、各種石器の製作・加工や石核の整形を行うだけでなく国東半島の内陸部や別府湾周辺及び瀬戸内の各遺跡に供給していたと考えられ、縄文時代における姫島産黒曜石の交易の実態が初めて明らかとなった。本遺跡からは竈を模した把手や九州では唯一の硬玉製玉斧、及び多数の瀬戸内系土器など一般の遺跡にはほとんど認められない遺物が多く出土しており、黒曜石交易の中心的役割を果たしていた遺跡と考えられる。

姫島産黒曜石は縄文時代早期後半の押型文土器の時期にその利用が活発化し、大分県下のほぼ全域（約七十遺跡）に加え、福岡・熊本・宮崎・鹿児島・愛媛・高知・山口・広島・岡山・島根の各県の約百遺跡において出土が確認され、重量一・グラムを超える大型の原石・石核を出土する中継基地的遺跡（国東市原七郎丸遺跡・大分市横尾貝塚・臼杵市野村台遺跡）も出現する。そして、東九州の沿岸部を北上・南下する道や瀬戸内や四国の南予へ至る海上の交易路の存在や大野川など内陸部をつなぐ陸上の道が浮かび上がり、大分川・大野川・大淀川など主要河川の河口周辺には中継基地的遺跡が存在した可能性が高いことが指摘されている。そして、姫島産黒曜石の分布は西日本最大であり時期による濃淡はあるものの、弥生時代後期までの長期間にわたり石鏃などの打製石器の主要石材として使用され続けた。国東市安岐町に所在する一ノ瀬2号墳は、平成六年（一九九四）度に開場整備事業に伴い調査された直径約二十三メートルの円墳である。六世紀末から七世紀前半の造営で、墳丘は削平され主体部の横穴式石室も石材のほとんどを失うが、周溝か



ら特異な須恵器器台が出土し注目を集めた。口縁部に小形壺と高坏を付した子持器台と鳥舟付器台で両者とも出土例は非常に少ないものであるが、中でも鳥舟付器台は全国的にも類例を見ない。

鳥舟付器台は、外反して開く口縁部から円筒状の体部に続き、外面に四条の突帯を巡らす。下から一段目の突帯の上に船に乗った人物と鳥を、二段目には鳥と小壺を、三、



四段目には小壺のみを配し、口縁部上面には龍と思われる装飾を施していた。これは、死者は船に乗り鳥に導かれながら龍の住む黄泉の国に至るという情景を立体的に表現したもので、同時期の装飾古墳にも船や鳥の描写は認められるが、本例は古墳時代の人々の葬送観念を立体的かつ如実に伝える資料でありその重要性・希少性は非常に高い。

竹田市久住町都野原田遺跡は、平成八年（一九九六）度に開場整備事業により調査された弥生時代中期～古墳時代中期の長期に亘る集落遺跡である。くじゅう連山の山麓、標高五七〇メートル以上の上面がやや平坦な丘陵上（全長約四百メートル、幅約百五十メートル）に位置し、二百五十棟の堅穴建物を確認されたが未調査部分等

左）一ノ瀬2号墳 右）一ノ瀬2号墳出土鳥舟付器台・子持器台

を加えるとその総数は三百五十棟を超え、これに集落の北側を区切る条溝・柱建物・小児甕棺墓・集団墓などが検出され、初めて弥生時代後期から古墳時代前期の集落の全貌がほぼ明らかとなった。

弥生時代中期から後期前半では少数の竪穴建物が点在し計画性などは看取されないが、後期後半から条溝・広場・集団墓地が認められると共に竪穴建物の広い展開と計画的配置が認められ、地域の拠点集落となる。弥生時代終末から古墳時代前期前半には集住化が進み、集落の南側の

小丘陵上に前方後方墳（仏原千人塚1号墳）と集団墓が造営される。前期中葉に頂点を迎える数百人からなる大規模拠点集落となり、その南側に位置する丘陵では集団墓が引き続き造られると共に前方後円墳

（仏原千人塚2号墳）が出現する。出土遺物では各種鉄器・孔が穿たれた石銅片二点などの玉類に加え、他に出土例の無い朝



都野原田遺跡出土弥生時代後期土器・鉄器・玉類・半島系土器 集落全景

鮮半島系土器（蓋）などが特筆される。

古墳時代前期後半になると集落は小規模化し、大半は周辺を流れる小河川の河岸段丘部に移動したと考えられる。古墳時代中期には数棟が散在するのみとなり、広域に広がる集落の一部としての機能を果たしたと思われる。集落の南東部に形成された集団墓（約五十基）の主体部は木棺墓で、内部調査を実施した三基からは鉄剣が出土しているが、全体的に墓の数が少ないことから被葬者は集落内の有力構成員（男性）と推定されている。さらに、本遺跡と南側に隣接する仏原千人塚古墳群は、古墳時代前期前半から中頃の集団墓に加え前方後方墳一基・前方後円墳一基が初めて同時に調査された事例となり、弥生後期後半から古墳時代前期における集落と墳墓の実態の一例を示すものとして注目される。

二 高速道路等の調査

昭和五十五年以降、農業基盤整備に伴う調査に加え国道10号線バイパス新設や九州横断高速道路・東九州道など道路建設に伴う発掘調査が県下各地で行われるようになった。中津市三光ノ原横穴墓群、同市伊藤田竊跡群、同市兼山遺跡、宇佐市尾畑遺跡、同市安心院町飯田二反田遺跡・杵築市山香町龍頭遺跡、大分市城原・里遺跡、日田市小迫辻原遺跡、竹田市長湯横穴墓群、津久見市津久見門前遺跡、豊後大野市加原遺跡・佐伯市森の木遺跡などが代表として挙げられる。

大分市大字東上野の飛山横穴墓群では、国道107号線改良工事に伴い昭和四十七年（一九七二）に三十二基の横穴墓が調査された。標高五〜二十mの丘陵斜面に形成され、六世紀中頃から七世紀前半の遺墓であるが、この時期の一般的な横穴墓には見られない副葬品が多く出土し注目された。六世紀中頃の第1号横穴墓からはほとんど類例が見られない須恵器脚付壺一点が、六世紀後半の第4号墓からは銀貼の「」形鏡板一对・金貼杏葉三点が、第7号墓からはガラス小玉をはめ込んだ金箔貼耳環一点が、4号墓と同時期の第23号墓からは鉄地金銅貼の矢筒金



飛山3号横穴墓 飛山横穴墓群出土須恵器・馬具・金環・耳環

具が出土した。そして五基の横穴から計九点の金環が、十基の横穴から計二十九点の銀環が、三十二基中十二基から辻金具や雲珠などの馬具が出土している。このほか玉類などの装身具や鉄刀などの鉄器も豊富であり、円墳など高塚墳の副葬品と比べても全く遜色はない。また、閉塞部に使用された結晶片岩の板石や石英礫は海部を象徴する石材と言えよう。

金貼・銀貼・金銅貼の各種馬具などは中央から供給されたものと考えられ、本横穴墓群には一般の農民や漁民と異なる海部の支配層やそれに次ぐ有力者達が葬られたようである。そして、別府湾を眺望する立地からは海上交通を担った集団と想定されよう。

中津市三光の上ノ原横穴墓群は、

山国川右岸の洪積台地の斜面（標高三十〜三五〇）に形成された墳墓群である。昭和五十六（一九八）

〜六十（一九八五）年に国道一〇号線バイパス建設に伴い五世紀後半

から七世紀初頃の横穴墓八十基が調査された。横穴の墓道部の綿密な

層位的調査と葬送儀礼とその過程の確認、埋葬回数と間隔の確認、

埋葬順序の確認及び出土人骨の精密な調査・分析・考察が行われ、

古墳時代中〜後期の親族構造とその変遷が国内で初めて報告された。

その概要は、横穴墓の被葬者は第一世代（成人男性）と第二世代（成人

男女・若年・小児）の二つの世代が基本となること。第一世代と第二

世代の各被葬者はいずれも血縁関係にあること。第一世代には鉄刀

等の武器類が副葬されるが、第二世代にはほとんど副葬されないこと

から、第二世代は家長の子供で家長にはなれなかつた人物と考えられる

こと。家長と追葬された子供たちの配偶者は葬られておらず、強い

こと。家長と追葬された子供たちの配偶者は葬られておらず、強い



右) 上ノ原横穴墓群遠景



左) 上ノ原横穴墓群出土玉類・須恵器



血縁重視の原理が窺われること。次世代の家長が死亡すると隣接地に新たな横穴墓が造られる。家長の墓が連続することから上ノ原横穴墓群の継承は父系の直系継承と考えられること。追葬された女性の中には経産婦が含まれ、結婚・出産した女性は実家の墓に葬られたと推定されること。弥生時代終末から五世紀中葉までの複数埋葬は兄弟・姉弟を主とするキョウダイ原理に基くもので、六世紀前半から中頃に家長夫妻を中心とする埋葬原理が出現し、上ノ原横穴墓群はその中間の過渡的段階と考えられることなどである。これらの成果は、それまでの人骨の分析や調査報告において決して語られることの無かつたものであり、考古学と骨考古学が融合することにより生み出された新たな地平を開拓したとして高く評価されており、その後の墳墓の調査・研究にも大きな影響を与えた。

中津市伊藤田窯跡群の調査は昭和三十二年（一九五七）に始まるが、昭和五十七（一九八二）～五十九年（一九八四）に中津バイパス建設に伴い草場窯跡・夜鳴池窯跡・睡ヶ迫窯跡・瓦ヶ迫窯跡が調査され、平成十六（二〇〇四）～二十年（二〇〇八）には中津三光道路建設により徳屋1・2号窯跡・コング窯跡が調査された。窯跡は三十四基が確認されているが、その総数は七十基を超えと言われ、規模や操業期間において県下で最も突出した窯跡群であることが判明している。

最初に六世紀後半の瓦ヶ迫窯跡が、次に六世紀末頃の草場窯跡が、これに七世紀前半の城山窯跡群A地区1号窯跡や徳屋1号窯跡が続いて造られる。そして、七世



伊藤田窯跡群出土須恵器

紀後半には徳屋2号窯跡が、八世紀前半にはコング窯跡が造られ、古墳時代後期から奈良時代前半までの長期にわたる操業が確認され、時期により窯の構造も変化する。さらに、須恵器と共に瓦も焼いた瓦陶兼業窯や須恵器の製作工房と考えられる遺構も確認されている。坪・高坪などの製品は時期により口縁部などの形が変化し、その変遷は畿内地域や九州の他の地域ともほぼ一致するものの、七世紀後半には壺・壺・高坪などに地域性をより強く示す器形も認められるようである。

宇佐市尾畑遺跡は、昭和六十二（一九八七）

（平成元年（一九八九）に国道10号線宇佐道路建設により調査された縄文時代）奈良時代の複合遺跡である。北Ⅱ区で検出された包含層からは、縄文時代後期後葉から晩期中葉に及ぶ大量の土器・石器が出土している。竪穴建物は一棟しか確認されていないが、遺跡の中心部分は伊呂波川左岸の河岸段丘部（標高約二十メートル）に想定され、当地域の拠点集落跡と言えよう。土器は浅鉢と深鉢を中心とし、石器には石鎌・磨製石斧・打製石斧・石錘・砥石などが数多く認められ、千点を超える扁平打製石斧と二七七点を数える磨製石斧は県内最多である。また、注目される遺物に土偶十七点、十字形土製品三点、円盤状土製品三点、勾玉五点、管玉三点、小玉三点、垂飾四点、原石一点、十字形石器一点、石刀五点、注口土器十点があ

る。祭祀に関わると思われる遺物である注口土

器・土偶・石刀の出土は県下で最も多く、十字形土製品や円盤状土製品なども出土例の少ない



尾畑遺跡出土縄文時代後期深鉢・土偶

遺物であり本遺跡の重要性を物語る。なお、玉類の多くは変成岩帯に含まれる暗緑色のクラン白雲母を石材とし、原石と製品の出土は本遺跡内の玉類製作の可能性を示していると言えよう。その他、奈良時代の遺物で県下唯一の「和同開珎」も注目される遺物である。

宇佐市安心院町に所在する飯田二反田遺跡は、昭和六十三（一九八八）〜平成二年（一九九〇）に宇佐別府道路建設に伴い調査が行われた。深見川に接した河岸段丘部（標高約八十メートル）に立地し、縄文時代後期前〜中葉に至る三時期の竪穴建物五基や土坑・屋外炉などが検出され、初めて複数時期の竪穴建物の実態が判明した。後期前葉の小池原式期一基、中葉の鐘崎式期二基・北久根山式期二基で、方形・隅丸方形・円形の各種平面プランが認められた。

炉跡には石囲炉・土器炉・地床炉の三種があり、石囲炉から土器炉、そして地床炉と変化する。主柱穴は四本

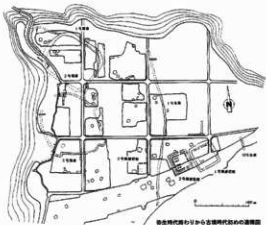


飯田二反田遺跡1号竪穴建物 縄文時代後期土器

尾畑遺跡出土和同開珎・注口土器

と七本が確認され、七本主柱の1号竪穴は長軸約六メートル、短軸約五・五メートルの隅丸方形をなし石囲炉の北側に立石を伴う。石器には、石鏃・石錐・石匙・磨石・石皿・礮石鏢・磨製石斧・打製石斧などが認められ、石鏃等の小形打製石器の石材には姫島産黒曜石が主に利用される。数多く出土している礮石鏢は、隣接する河川における網漁等に使用された可能性が高く、この時期以降に出土数を増す扁平打製石斧は使用痕などから土掘り具とされ、沖積地における開発の進展に伴うものと見られる。そして本遺跡は、縄文時代後期に出現した一時期二基前後からなる小規模集落跡の代表的遺跡と言えよう。

日田市の台地上に位置する小迫辻原遺跡では、昭和六十三年（一九八八）に九州横断道路建設に伴う調査により国内最古の豪族居館二基が検出され大いに注目を集めた。その後、日田市教委により標高約百二十メートルを測る台地全体の確認調査が行われ、さらに居館一基の存在と古墳時代初頭から前葉の環濠集落



小迫辻原遺跡遺構配置図



小迫辻原遺跡居館全景

跡三基や集落と居館を区切る条溝などの遺構が確認され、古墳時代前期における首長権力確立の実態や居館の構造など重要性の高い情報を提供する遺跡として国史跡となつた。

1号居館は、東西四十七㍎、南北四十八㍎の方形に巡る溝で区画され、その内側にはこれと平行する小溝が掘られ柵等により二重に防御されていたと見られる。内部の面積は千平方㍎と広大であるが、遺構は西側に掘立柱建物一棟が検出されたのみである。この建物は神殿又は首長の住居と考えられ、全く遺構が確認されなかつた東半部分は首長により執り行われる祭祀空間と想定されている。そして、2・3号居館は次第に小型化するが、その構造は1号と変わらない。集落の構成員が居住する環濠は東西約九十・百五十㍎、南北百・百二十㍎の規模を有し、その内部に形成された方形の堅穴建物の規模は二十・五十平方㍎が一般的で豪族居館とは圧倒的な差がある。居館の溝からは畿内系の庄内式・布留式土器や山陰系土器が多く出土しており、その出現には外的要因が大きく作用していたことが窺われる。なお、豪族居館と環濠集落条溝がセットになるのは古墳時代前期前葉であるが、当地域において同時期の前方後円墳の存在は未だに確認されていない。



小迫辻原遺跡 2号居館出土土器



小迫辻原遺跡 1号居館出土土器



龍頭遺跡 ドングリ貯蔵穴・網袋・縄文時代後期土器・全景写真



杵築市山香町の龍頭遺跡は、平成六・七年（一九九四・九五）に県道建設により調査された遺跡で、県内で初めて縄文時代後期のドングリの貯蔵穴六十基が発見されたことで知られる。貯蔵穴は標高約百㍎の谷部の湧水地点に集中して形成され、直径一・二㍎の円形又は楕円形を呈し深さ約一㍎前後を測る。これらは縄文時代後期前葉から中葉の比較的短期間に形成され、残りの良い貯蔵穴では底にイチイガシなどの木葉を敷きドングリを半分ほどの深さに入れた上に木材と重しの石を置き、その上に更にドングリを入れた後に1回目と同様の重しを置いていた。ここに貯蔵穴を設置した理由は、くり虫などの虫害を防ぐと共に地下水の水温が年間を通して十六度前後と一定であり保存に好都合であったことが考えられる。四十五基の貯蔵穴からはイチイガシが検出され、他のドングリ類は非常に少なく選択的採取が窺われる。遺跡全体のイチイガシの出土量は約四百四・グラムと多量であり、このイチイガシが縄文人の主食で

あったことを示している。人々は良く乾燥させたドングリを石皿と磨石で粉にし、団子状に調理したものを食していたと思われる。さらに、貯蔵穴からはドングリの運搬に使用された編籠九点も出土した。編籠は蔓科植物の蔓を用いて造られており、これらから、縄文人は自ら管理した木々に実るドングリが落下する九ヶ月十二月の間、集中的に採集し籠に入れて運搬し大量に備蓄していたことが窺えよう。

竹田市直入町に所在する長湯横穴墓群は、平成十三年（二〇〇一）に県道庄内久住線道路改良工事に伴い調査された。芹川左岸の丘陵斜面（標高四百七十七・七十五）に形成された九基の横穴墓は五世紀後半から七世紀前半の造墓であるが、六世紀前半の七号横穴墓からは三体の白骨（老年男性・成人女性・小児）と鉄刀一点・鉄剣二点・ゴホウラ貝製貝輪一点・ヤコウ貝製垂飾一点・ガラス玉二十点など豊富な遺物が出土し大きな注目を集めた。ヤコウ貝製垂飾は本州初、横穴墓からのゴホウラ貝製貝輪は大分初、直刀と鉄剣に装着された直弧文の施された鹿角製刀装具は県下三例目であり、これらは最初に葬られた老年男性の副葬品と判断され、貴重かつ希少な副葬品を保有することからこの人物は当地域の首長層であることは疑いない。なお、三体の白骨は全て散乱状態



長湯7号横穴墓の創傷痕のある男性人骨・長湯横穴墓群全景



長湯横穴墓群7号横穴墓出土 鉄剣（鹿角製刀装具）・ゴホウラ貝製貝輪・ヤコウ貝製垂飾

で検出されているが、これは最終埋葬の十年後あまり後に再び開口し全ての被葬者の関節をはずしバラバラにする再生阻止儀礼が行われたことによるとされる。

男性人骨には、鋭く重量のある利器による左顔面から後頭部、左鎖骨、左上腕骨、右尺骨の五ヶ所に創傷が認められた。創に骨の増殖が認められないことから死の直前の受創で、肩など三度にわたり切りつけられ、最後に正面から左顔面と後頭部を切られ即死したものと判断された。庇傷の存在は甲冑などの防具を付けていない無防備状態であったことを示し、戦いではなく日常のなかで不意に襲われ殺害されたことが窺われ、古墳時代の殺人事件を語る数少ない貴重な事例となった。

平成十二（二〇〇〇）～十三年（二〇〇〇）、都市計画道路横塚久土線建設に伴い調査された城原・里遺跡（中安遺跡第二・三次調査）から七世紀末から八世紀後半の掘建柱建物群が検出された。この中で八世紀前半の建物群は、中央の四



城原・里遺跡第1期～3期建物群位置図

面庇建物を囲みロ字状に配置された建物群八棟と南側建物二棟の間に四脚門と見られる建物が存在し、円面硯・刻書土器及び都城系土器の出土から本遺跡は海部郡の郡衙政庁と判断された。

さらに平成十四(二〇〇二)～二十一年(二〇〇九)度に行われた第五・七～九・十二次調査では、七世紀後半から八世紀中頃の建物群二十数棟や櫓列が発見された。七世紀後半から八世紀初頭の建物群は「フ」字状に配置され、その中ほどに中心の建物二棟が設けられており、郡衙の前段階の評価である可能性が強くなった。出土土器では搬入されたと考えられる畿内系土器や須恵器陶硯などが注目される。評価から郡衙への転換を示す遺跡は全国的にも少なく、今後さらに検証を要する幾つかの問題もあるが、律令制度の地方の浸透とその過程を物語る遺跡として重要性は高い。

津久見市津久見門前遺跡は、平成十四年(二〇〇二)に東九州道建設に伴い調査された寺院跡である。標高四十～五十メートルの山地の斜面に平坦面を造成し本堂や庫裏などの建物を配置したと思われるが、建物の規模・構造・配置は開墾などにより不明であった。しかし、斜面に形成された包含層から多量の瓦(鬼瓦・軒丸瓦)：

軒平瓦・丸瓦・平瓦・鳥舎・雁振瓦など)を中心とする遺物が検出された。これらは十四世紀末から十五世紀前半の寺院に葺かれていた瓦とされ、小規模な寺院ではあるがこれほど多くの中世瓦の出土は他に無い。この他の遺物では、備前焼(甕・壺・播鉢)・古瀬戸・瓦質土器(火鉢・香炉・燭台)・土師質土器(杯・小皿・海老錠・釘などが出土している。また、その廃絶は永享七年(一四三五)に大友氏と室町幕府が争った「姫岳合戦」による可能性が高いとされている。十五世紀後半以降、小規模な復興の痕跡が認められるが十六世紀末には寺院としての命脈を完全に絶たれたようである。そして、伝承や記録から本遺跡は東側に現存する禅宗寺院解脱閣寺の前身に比定され、中世に大友氏の水軍として活躍した津久見衆との関係が指摘されている。

豊後大野市加原遺跡は、平成二十一年(二〇〇九)～二十四年(二〇一三)に一般国道57号大野市竹田道路建設により調査された。標高約二百メートルの谷部斜面から、古墳時代後期～終末期と平安時代の二時期の遺構が確認されている。注目されるのは平安時代(九世紀中頃～十世紀初頃)の大型掘立柱建物群やこれに伴う土師器と越州窯系青磁である。建物は主屋と倉庫からなり、主軸が平行又は直交することや果下で出土例の少ない越州窯青磁碗と合子を保有することから有力者の屋敷と考えられている。この時期の越州窯青磁は大宰府や鴻臚館に集中することから、本遺跡の有力者は大宰



加原遺跡出土越州窯青磁碗



津久見門前遺跡出土平瓦・丸瓦

府との関係をもつ人物と想定されよう。平安時代に大宰府と関わっていた地方の有力者は郡司層である可能性が高いと思われるが、本遺跡からは越州窯青磁を除き墨書土器や硯など官街に関係する遺物は出土していない。一方、遺跡の規模や構造は一般的集落とかけ離れており郡司層の居宅である可能性も考慮されよう。その後、十一世紀から十二世紀にかけて再び木棺墓を伴う掘立柱建物形成されるが短期間で廃絶したようである。

佐伯市森の木遺跡は、東九州自動車道建設に伴い平成二二(二〇〇九)～二三年(二〇一〇)に調査された大分県最古の縄文時代集落跡で、大越川左岸の周囲を山に囲まれた標高三一メートル余の丘陵裾部に立地する。隆帯文系土器を中心とする草創期中頃の竪穴建物六基とこれに後続する草創期後半の無文土器に伴う竪穴建物十五基、草創期後半から早期前半の屋外炉二十基及び早期の集石五十数基が検出された。竪穴建物は円形プランとなるものが多いが、内部に炉は形成されず柱穴にも規格性はなく規模も一定しない。これらから竪穴建物は屋根が全周しない片屋根などの比較的簡素な構造と推定される。出土遺物も全体に少なく一時期二基前後からなる小規模な集落で、比較的短期間の利用が繰り返行われたと考えられよう。

県内で初めて出土した隆帯文系土器は、



森の木遺跡近景



森の木位遺跡出土環状石斧・縄文時代草創期土器

肥厚した口縁部の外面に矢羽根状の刻目や刺突文・短沈線文などの文様を施し底部は平底をなす。これに平底の無文土器を伴う段階から無文土器のみの段階と移行し、さらに二日市洞穴の条痕調整の無文土器へと変遷すると想定されている。石器では石鏃・石鏃・石匙・環状石斧を始め各種の石器が出土しているが、磨石・蔽石・石皿が多い点に特徴が認められるものの、その大半は縄文早期に属するようである。このように、これまで不明な点が多かった草創期後半の土器変遷が明らかになると、竪穴建物を始めとする集落の実態の一端が確認された意義は大きい。

中津市三光の台地上(標高約四十メートル)に立地する諫山遺跡は、東九州道建設により平成二三(二〇一一)～二五年(二〇一三)に調査された縄文時代から近世に及ぶ複合遺跡である。この中で注目されるのは弥生時代中期後半から後期の竪穴建物群を主とする遺構である。前期末頃に台地の東側に貯蔵穴群が出現するのを皮切りに、中期には東半部の広い範囲に集落が展開し、中期後半には台地の西側にも竪穴建物が広がり、当地域最大級の集落遺跡に発達する。しかし、古墳時代になると集落は姿を消し、東西の沖積地にその中心は移動したものと考えられ、再び集落(屋敷)が出現するのは十五世紀後半以降になる。弥生時代中期は住居跡であるやや大型の円形の竪穴建物二十棟余りと小方形建物(作業小屋等)に少数の掘立柱建物(倉庫)及び貯蔵穴からなる。この状況は竪穴建物が方形となる後期から古墳時代初頭まで続くが、台地の中央部分は一貫して建物等が形成されない空白地となり、この一帯は集落の広場や耕作地として利用されていたものと思われる。出土土器は中期・後期のいずれも北部九州系を主体とし、大分在来の下城式・安国寺式土器や瀬戸内系土器は客体として少数認められるに過ぎず、周防灘沿岸の県北部は一貫して北部九州土器文化圏の中に含まれる。石器には石包丁・石剣・石ヤ・砥石・磨製石斧・蔽石・石皿などがあるが、石包丁と砥石の出土が多いと言えよう。また、柱穴から完形の小形仿製鏡(内行花文鏡)一面が検出されている。

三 大規模開発等に伴う調査

大分市の下郡遺跡群は大分川下流の右岸の沖積地（標高約五〜七㍎）に位置し、土地区画整理事業に伴い大分市教委により九十六㍎と広大な対象地が、昭和六十（一九八七）〜平成十五年（二〇〇三）度に調査された。発掘調査された地点は百四十三箇所に及び、縄文時代から現代に続く複合遺跡であることが判明し



下郡遺跡群出土弥生時代中・後期土器 大型器台 諸手鎌 平鍬 鋤 石斧柄 鉄器

ているが、弥生時代・奈良時代・平安時代初頃にそれぞれ面群が認められる。弥生時代では中期に南北方向に走る溝が掘削され微高地上の広い範囲に集落跡が展開し、後期になると環濠集落が出現し堅穴建物が数多く検出され、古墳時代前期まで存続する。多数出土している土器類以外の遺物では木製農具・板状鉄斧・鉄剣・銅鋼などに加え、丸木船を模した船形土製品や青銅製鉈・大型器台などが注目される。その後、古墳時代中期から後期にかけて堅穴建物等の遺構は希薄となるが、第十八次調査区の堅穴建物から出土した陶質土器器台と共存する高坏・小型壺・甕などの土師器は数少ない五世紀前葉の一括資料として重要である。そして、本遺跡群が再び活発化するのには奈良時代中頃以降となる。奈良時代後半から平安時代前期になると主軸を南北に統一した大型掘立柱建物十四棟・井戸十数基・道路状遺構・土坑等が確認され、郡衙政庁の位置や建物配置など詳細は明らかではないが、須恵器や土師器に加え円面硯・石帯・墨書土器・斎串・緑釉陶器など官衙特有の遺物の出土から大分郡の郡衙が形成されていたと想定されている。古代末から中世になると掘立柱建物や井戸などの遺構は少なくなり、十五世紀後半以降再び館等が集中して形成されることが確認されている。報告書では弥生時代前期末から古墳時代前期の出土土器と奈良時代後半から平安時代前半の土器群は分類と編年が提示され、大分平野を中心とする別府湾沿岸地域の指標となっている。

豊後大野市千歳町の鹿道原遺跡は、平成元年（一九八九）に工場建設に伴い調査された弥生時代中期末〜古墳時代前期の大規模集落遺跡である。標高百三十〜四十㍎の台地上に立地し、四万五千平方㍎の広い調査区から、弥生時代中期末〜後期中葉十九棟、後期後葉から古墳時代前期前葉百五十八棟、時期不明六十棟の計二百三十七棟の堅穴建物、二百二十一棟の倉庫と考えられる掘立柱建物が検出された。そして、弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉には、中央の広場とその周辺に展開する住居群、東端部の最高部に密集する倉庫群と住居の周辺に立ち並ぶ倉庫群、広場とこれに続く道などが計画的に配置されていたが、古墳時代前期後半になるとその姿を消す。

弥生時代後期の一般的集落においては倉庫と考えられる掘立柱建物は数棟と少数であるが、十数棟が並列又は直線的に配置される並倉が初めて検出された事例となり、一集落に止まらず地域全体の収穫物の保存・管理を行った倉庫群と考えられる。そして、集落的計画的配置と合わせ当該地域の全体を支配した首長の存在を窺わせる。なお、出土土器は大分平野部とほぼ一致するが蒸し器である甗と甑などを乗せるための器台を欠き大野川の中・上流域地域特有の粗製甗を含むこと、鉄器に鉄鏝と手鎌が多いこと、石器に石皿や磨石が多いことなどは大分川下流域など平野部の遺跡とはやや様相を異にし、畑作を基盤としながら狩猟やドングリなどの採集にも一定の比重を置いた生産活動が考えられる。そして、古墳時代前期中頃以降、本遺跡を含め当該地域の集落遺跡が台地上から姿を消すことは大野川上流域と同様の現象である。

大分市大字横尾と大字松岡の丘陵上（標高五十〜百二十メートル）に展開するスポーツ公園内遺跡群（十一遺跡）は、平成八（一九九六）〜九（一九九七）年度に調査され、その調査総面積は六万六千平方メートルに及ぶ。中でも、一方平野遺跡では旧石器時代後期のナイフ形石器・角錐状石器・剥片尖頭器・巖石等の製品に加え二百

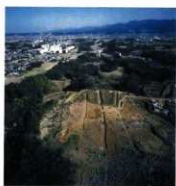


上) 鹿道原遺跡近景 下) 銅鏡・管玉・鉄器・弥生時代後期土器

点を超える石核と多数の剥片が出土し、石材の大半を大野川の河川敷で採取したと思われる流紋岩が占める。流紋岩の石核と剥片は接合するものも少なからず認められ、多量の石核・剥片の出土から本遺跡内の消費だけでなく、周辺の遺跡へ石材を供給していた可能性が高いと考えられている。さらに、同時期の石器は一方平野部・IV遺跡・牧ノ内遺跡などでも出土しており、この一帯が旧石器時代後期において拠点としての位置を占めていたことを示している。

また、一方平野IV遺跡からは縄文時代晩期末頃の刻目突帯文土器、弥生時代前期の板付式系土器や下城式土器がややまとまって出土し、この間の土器編年案も提示されている。甗と甑を主とし両者は包含層からの出土であるが、当該期の資料は大分平野ではやや希薄でありこれらの資料が現在でも基準資料の一つとなっている。

宇佐市川部南西地区墳墓群は、駅館川右岸の台地丘上（標高約三十メートル）に所在する。平成九（一九九七）・十年（一九九八）に宇佐市教委による展望台建設に伴う調査が行われ、南北十七基、東西約十三基の方形周溝墓一基とその内外に三十基の墓が検出された。内側には中心主体部となるH1・H2



上) 一方平野遺跡遠景 下) 一方平野I遺跡出土剥片尖頭器・接合資料・刻目突帯文土器・板付式系土器

石棺が、東側の祭祀空間と想定される部分を除く三方方向に石棺墓五基・石蓋土坑墓二基・木棺墓一基が、溝の外側には石棺墓三基・石蓋土坑墓八基・土坑墓三基・小児墓六基が展開する。最初に造られた日乙石棺は最も規模が大きく棺内は朱で赤く塗られ、舶載鏡一点（四乳八禽鏡）・硬玉製勾玉一点・碧玉製管玉五点に加えガラス玉・鉄剣・鉄鏃・刀子などが副葬されており、これらはまさにオウ（王）の副葬品として遜色の無いものである。

これに次ぐ規模の日乙石棺から副葬品等は皆無であったが、造墓に先立ち日乙石棺の蓋石を開け内部の確認を行っていることとから両者は親族関係にあったと想定される。その周辺の墓四基は鉄鏃・鉄剣・刀子・鏃などを保有するが、溝外側の墓では一基から鉄鏃三点が検出されたのみで他は全く副葬品を持たない。これらの墓は弥生時代終末から古墳時代初頃の比較的短い時期の造墓と考えられる。

そして、この時期の成人墓のラックは石棺→木棺墓→石蓋土坑



宇佐市川部南西地区墳墓群



川部遺跡南西地区墳墓群H2石棺 銅鏃・玉類



墓→土坑墓の順と考えられることや副葬品の有無などから、内部にオウ（王）とその近親者又は集落の有力者が、外側には選ばれた集落の構成員と子供が埋葬されたと考えられる。この現象は、首長が集団の中に止まり首長権の確立が完全に行われていない状況を反映していると見られ、前方後円墳が出現する前夜の様相を示す貴重な遺跡と言えよう。



左・下) 八坂遺跡群出土青磁碗・和泉型瓦器碗ほか 上) 八坂中遺跡全景

平成八（一九九六）～十年（一九九八）、杵築市を流れる八坂川の河川改修事業により八坂久保田遺跡、八坂本荘遺跡、八坂中遺跡の調査が行われた。三遺跡の調査面積は五万七千平方メートルに達し、平安時代から近世初期の長期にわたる集落や水田遺構が確認された。水田開発は

古代から開始されるが、十一世紀後半になると沖積化の進展により集落が展開し、

楠葉型や和泉型などの畿内系瓦器碗・吉備系土師器碗・備前

焼・常滑焼・京都系土師器・龍泉窯系青

磁碗など外来系遺物が出土している。瓦器

碗や土師器碗などの外来系土器は船乗り

など交易に関わる人々が私物として持ち込んだと推定され、

本遺跡は八坂川下流域における中心的港湾であった。中世後半には八坂久保田遺跡と八坂本荘遺跡は再び水田化されるが、八坂中遺跡では十三世紀後半から大規模な集落が形成され、十六世紀になると方形に区画された館跡三基も出現する。館の規模は方半町に及ばないことから、在地の小領主層の築造と見られよう。館跡は十七世紀になると廃絶し、一帯は水田化され集落の中心は西側の丘陵裾部に移動したと考えられている。この調査により、平安時代後期から戦国時代の長期に及ぶ集落と水田の変遷の実態の一端が明らかとなりその成果は大きい。

平成十(一九九八)〜十二年(二〇〇〇)に公共施設建設に伴う調査が行われた国東市飯塚遺跡は、田深川河口右岸に立地する遺跡である。国東市教委による発掘調査により、標高三〜五メートルの緩斜面から八世紀後半から九世紀前半の道路跡と側溝・掘立柱建物十数棟・櫛列な



上) 飯塚遺跡全景 下) 飯塚遺跡出土人形・斎串・木筒、越州窯緑釉・土師器

どの遺構が検出された。幅約十メートルの道路跡は河口の棧橋に続くことや道路の左右に設けられた掘立柱建物は倉庫とその管理施設と考えられ、本遺跡はそれまで文献でしか確認されていなかった「国崎津」の一部と判断された。

出土遺物には須恵器や土師器に加え、墨書土器・刻書土器・転用硯・越州窯青磁碗・石帯・緑釉陶器・埴輪など官衙特有の遺物に加え、木筒・斎串・人形・馬形・下駄などの各種木製品が認められた。木筒からは、農作業に動員された人数、稲穀の収納と出荷、木製品や金属製品の製作、まじない等に関する記録や「武蔵里長」・「国前臣刀佩」など人名等が記されるだけでなく、豊後国衙・国崎郡衙・宇佐神宮と宇佐宮弥勒寺・大宰府などとの深い結びつきを示す記述が認められる。これらから本遺跡は、稲穀や鉄・木製品など手工業製品の輸送や保管において単なる津(港)としてだけでなく、東九州のみならず瀬戸内海の海上交通においても大きな役割を果たした重要施設であったことを物語る。

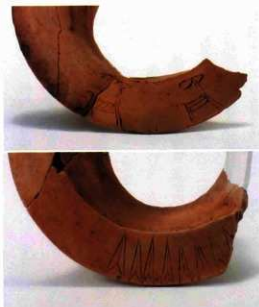
工業団地造成のため平成十四年(二〇〇二)から平成二十九年(二〇一七)にかけて十六次に及ぶ調査で総面積十萬五千平方メートルが発掘された玖珠町四日市遺跡は、玖珠盆地を望む標高三百六十〜三百八十メートルの台地上に立地し旧石器時代から中世に及ぶ複合遺跡である。注目されるのは、弥生時代中期後半に形成された円形と方形の竪穴建物数十棟に加え貯蔵穴・円形周溝遺構・掘立柱建物などからなる大規模集落跡と判明



四日市遺跡全景

した上である。また、中期後半から出現する長方形竪穴建物は倉庫などではなく明らかに住居として形成されており、その出現は他地域に先駆けるものとして注目された。一方、中期後半と後期末から古墳時代初期の竪穴建物から多量のドングリ類の炭化物（トチ・イチイガシ・コナラ）や炭化米・アワ・アズキ・ダイズ・マメなどの栽培植物が出土した。これは、内陸部では弥生時代中・後期においてもトチなどのドングリ類と畑作への依存が一定の割合を占めていたことを示すものとして重要である。その他、床面積が百平方メートルを超える大型掘立柱建物はその北側に祭祀土坑と考えられる遺構を伴い、集落の構成員全体が関わる祭祀が行われた施設と想定されている。

中期後半の土器は北部九州系の須玖式系土器（甕・壺・高杯・鉢・器台など）が主体を占める。特筆されるのが玖珠地域で初めてとなる筒型器台や、壺の口縁部に鹿二頭や鶴八点が描かれた絵画土器は県下初例であり、本遺跡は当地域における拠点集落の一つとして大きな役割を果たしたものと考えられる。



上) 四日市遺跡出土絵画土器（鹿・鶴） 下) 丹塗壺・壺、筒形器台

さらに、石器の中で投擲が百六十八点と多いことも特徴の一つで、これに砥石二十四点、石包丁十三点と続き、砥石の多さは鉄器の利用も決して少なくなかったことを示すものか。また、平安時代（九世紀）の木棺墓から出土した越州窯青磁唾壺や中国製の無文隅入方鏡なども出土例の非常に少ない資料であり、墓の被葬者は玖珠郡の郡司層と思われる。



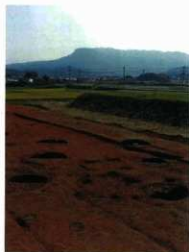
越州窯青磁唾壺



中国製の無文隅入方鏡

平成二十三年・四年（二〇一一・二）度に道の駅建設に伴い一万四千平方メートルが調査された中津市大字加来に所在する法垣遺跡は、縄文時代後期・古墳時代後期・奈良時代後半〜平安時代の三時期を中心とする複合遺跡である。その中で縄文時代後期中頃の掘立柱建物六棟は最も注目される遺構である。建物は一×二間で面積約十〜二十二平方メートルとやや小型の長方形をなし、柱痕跡から柱の直径は約二十〜四十センチと幅が認められる。柱の埋土や抜き取り跡の出土土器からいずれも鎌崎式土器の新段階の所産とされるが、県下において縄文時代の掘立柱建物はそれまで未確認であった。掘立柱建物六棟は遺跡の南側に集中して形成されているが、柱の大きさや柱間の間隔が一定しないことなどこれらは倉庫などの建物ではないと考えられよう。本遺跡の南側約五キロほどには標高六百五十九メートルの八面山が位置し、これを望む場所に意識的に設けられた施設である可能性

が高い。さらに、縄文時代後期中頃から後葉の堅穴建物八棟も検出されており、S.H24からは頭部を離断した人骨が検出され、断体儀礼が行われた廃屋墓と考えられている。その他、破片ではあるが人の顔を忠実に近い形で表現した人面形土製品やカラスザシヨウの果実を多量に含む土器なども特異な遺物であり、類例はほとんど知られない。



法壇遺跡から八面山を望む

四 大友氏遺跡の調査

大友氏遺跡の調査は、平成八年（一九九六）度の土地区画整理事業に伴う大分市教委の調査により始まる。平成十一年（一九九九）からはJR大分駅高架事業に起因する県教委の調査が、翌年からは国道10号古国府拡幅事業による調査が、平成十五年（二〇〇三）からは都市計画道路庄原佐野線元町工区に伴う調査が、それぞれ行われてきた。長期にわたる発掘調査から、鎌倉時代に始まり江戸時代初めに終焉を迎えた中世都市「豊後府内」の全体像が把握されつつある。

「豊後府内」は大分川左岸の自然堤防上（標高約五〜六メートル）に位置し南北約二・一キロ、東西約〇・七キロの範囲に、大友館・蔭山万寿寺・御藏場などの中心施設をはじめ、町を区画する四本の南北街道と五本の東西道路が設けられ、街路や道路の周辺には数多くの町屋や寺院などが展開していた。江戸時代に描かれた「府内古図」には第一南北街道に下市町・中之町・工座町・上市町などが、第二南北街道に今在家町・南小路町・小笠原町・稲荷町・唐人町・櫻町・御内町・後小路町・小物座町などが、第三南北街道に下町・御西町などが、第四南北街道に穴打町・下町・中町・上町などの町名が記されているほか東西の道路にも多くの町名が残り

その数は三十八を数え、街路の交差点には「木戸」も描かれている。また、万寿寺に加え本光寺・妙厳寺・福田寺・善巧寺・瑞光寺・真花寺などの寺院やダイウス堂などの施設の名も記されている。これまでの百五十次を超える発掘調査により、大友館・万寿寺を始め街路や町屋などの実態も次第に明らかとなってきた。そして、この「豊後府内」の町屋の形成は万寿寺の創建と同時に開始された。

蔭山万寿寺は、徳治元年（一三〇六）に大友氏五代貞親が博多の承天寺から直鎭智促を招聘し創建した臨済宗寺院である。その後、暦応四年（一三四一）に禪宗寺院の官位制である五山十刹の十刹に、延文三年（一三五八）には第八刹に列せられた格式の高い寺院であった。寺域は、東西約二百四十メートル、南北三百六十メートルを測り県下最大の面積を占める。江戸時代の記録によれば、総門・山門・仏殿・土地堂・法堂・観音殿など主要伽藍二十三棟に加え、全体では四十を超える建物が存在した大規模寺院であった。

四至の中で寺域の北限を区画する濠は、北西隅付近で幅六・三メートル、深さ二・五メートルを測る大溝で、十五世紀末頃に開削され十六世紀後葉には埋められていた。濠の東側は次に幅を増し大分川まで続き、西側に設けられた御藏場に納める各種の物資を運ぶ舟入としても機能していたよう



中世大友80次調査区木戸



「府内古図」C類

ある。西限濠も幅約八び、深さ二・五びと大規模なものであるが、十六世紀後葉には埋め立てられ町屋が形成されていた。南限も濠により画されていたと考えられるが未確認であり、東限は河岸段丘により区切られるものの区画施設の実態は明らかとなっていない。

寺域内には、伽藍などの施設を区画したと考えられる南北方向と東西方向の溝が数多く検出されている。この中で注目されるのが中央やや南寄り検出された溝で



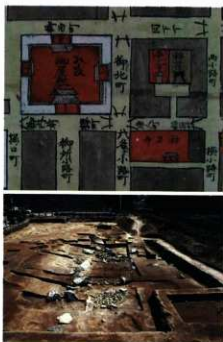
万寿寺第10次調査区・北堀・第7次調査中世墓・井戸枠・縹銭・朝鮮産陶器ほか

ある。十四世紀に開削された溝で、幅約二び、深さ約一びを測り、途中で二度ほぼ直角に折れ曲がり南北方向に走る。これは調査前の地割りと一致し、南側に延長すると第一南北街路に接続する。また、この溝の六十五び東側には平行して南北に延びる小溝と柱穴列からなる区画施設があり、この間に仏殿や法堂などの主要伽藍が南北方向に直線的に並びながら展開していたと想定されよう。

南西部の一角には墓が検出された。十五基が南北方向に形成されているが、調査区の南側にもさらに数基が存在すると見られ全体では二十数基からなると考えられる。墓は一辺一・一・五びの長方形をなす木棺墓で埋葬は側臥屈葬と判断されるものが多く、土師質土器・小皿などが供えられているが、数珠などは保有しないことから僧侶ではなく寺で働く大工や職人等の墓である可能性がある。また、その時期は十四世紀後葉から十五世紀前葉の所産とされ調査において墓標は確認されていないが、ほとんど重複しないことから五輪塔などの墓標が立てられていたと思われる。

このほか、境内からは三十基以上の井戸が検出されている。寺域の中央部に形成されたものは寺院形成以前の十二〜十三世紀の施設に伴い、寺院の前に有力者の館が形成されていた可能性が高い。また、十四世紀以降の井戸の多くは境内の東や西寄りに造られている。十四世紀から十五世紀代の井戸は、方形縦板組井戸枠で水溜に曲物を設置するものや結桶を井筒とするものもある。十六世紀後葉になると凝灰岩製六角形石組井戸枠が出現し、これには五輪塔など石塔の部材が転用されることも多い。

五回に及ぶ火災の処理等に伴う瓦などを廃棄した土坑からは、大量の瓦類・土師質土器・瓦質土器・備前焼・瀬戸美濃焼・貿易陶磁器（中国・朝鮮・タイ等）・石製品・木製品・土製品・鉄製品・青銅製品など多種多様な遺物が出土している。中でも、南西部で検出された銅銭一括遺構からは、百枚を一組とする縹銭五十組の塊が二つ出土し、合計十貫文（一万枚）に及ぶ九州初的大量銅銭埋納事例として注目され塊のまま取り上げられた。銅銭は布袋など包まれ穴に埋められたと思われる。



「府内古図（大友氏館）」
大友館庭園跡、京都系土師器



町屋の整備なども同時に行われたと考えられている。しかし、天正十四年（一五六〇）十二月の島津氏による府内侵攻により万寿寺や町屋と共に焼失し、再び館が再建されることはなかった。

中心建物の周辺からは、館で行われた儀礼や饗宴で使用されたと思われる大量の土師質土器が棄てられた廃棄土坑が多く検出されている。出土土器類の約八〇九割が土師質土器類で、貿易陶磁器や国産陶器の出土は周辺の町屋と比べ非常に少ないことが指摘される。土師質土器は在地系と外来系からなり、前段階からの系譜を引く在地系は十四世紀から十五世紀まで存続するが、十五世紀末以降はほとんどその姿を消す。その後、口縁部が逆八字状に開きオサエの工具痕跡を残す土師質土器が十五世紀末から十六世紀前半まで主体を占め、十六世紀中葉から後葉には手づくね成形の京都系土師器が中心となる。館の廃絶に伴う土坑からは、中国元青花梅瓶・青磁夜学型器台や白磁鉄絵陶器壺など全国的にも出土例の少ない貴重な陶磁器が出土し、大友氏の熱心な骨董趣味と海外交易の質の高さを示している。

十四世紀前半の創建期の所産と判断され備蓄銭なのか、地鎮などの祭祀に使用されたのかは明確ではないが、近年では前者とする見方が有力となっている。万寿寺の北西に隣接する大友氏館では、万寿寺の創建よりやや遅れた十四世紀後半になり大規模な土木事業や規格性をもった建物群が出現する。十五世紀後半になると中心部でやや規模の大きな盛土整地が行われ、ここに館の中心的建物（主殿）が形成されたと考えられている。以後、中心施設的位置は踏襲されるが、大友義統が家督を継いだ十六世紀後葉になると、館は方二町に拡張され南東部の庭園も大規模な改修がなされるだけでなく、主要街路や町屋の再整備も行われ「豊後府内」の町は最盛期を迎える。

中心建物は礎石建物で南北三十㍎、東西十五㍎の規模を有し、館の前面（東側）には空閑地が広がる。その周辺には「遠侍」「記録所」「対面所」など六ヶの建物、館の西側には「厨」・「蔵」・「御台所」・「納殿」など七ヶの建物が配置されていたようである。南東部の庭園には東西六十七㍎、南北三十㍎の大規模な池状遺構が設けられ、景石の配置や川原石による護岸及び中島や中島なども伴う入念な造りとなる。館の四至は築地塀で区画されていたと考えられ、第二南北街路に面する東側に大門が設けられたと推定されている。そして、第二南北街路と木戸の設置及び

町屋の調査では、大友館の前面から北側にある「御内町」・「櫻町」・「唐人町」・「名ヶ小路町」・「横小路町」などで注目される遺構・遺物が検出されている。「御内町」の調査（国道10号古園府拡幅第13次調査）では、十六世紀後葉〜末の土坑からウツニカメのメダイ一点が、包含層から府内型メダイ2点が、十六世紀後葉の井戸からタイ産の練り上げ手土器クンデイ形水注一点が出土した。ウツニカメのメダイは鉛と錫の合金で、直径約二㍎の円形をなし片面にキリストの顔が、もう片面にキリストを抱くマリアが描かれている。キリストの背景にはヴェールの表現があることから「ヴェニカの御影」を描いたものと考えられる。ウツニカメはキリストがゴルゴダの丘に向かう途中、キリストの顔の血と汗をヴェールでぬぐった女性であり、そのヴェールにキリストの顔が映し出されたという奇跡に基づくもので、キリスト教ではこれを「真の像」として位置づけている。

府内型メダイは長軸約二㍎と小形の茄子に近い形状をなすもので、紐を通す孔が



右) クンディ・真鍮製指輪・コンタツ 左) ヴェロニカメダイ・インゴット・府内型メダイ・キリシタン墓

穿たれる。ほかの調査区を含めるとこれまで約四十点が出土しており、その主成分は鉛でこれに錫と鉛の合金及び純銅などがある。そして、鉛同位体比分析によりタイ産(ソント・鉱山)の鉛であり、これを原料に「豊後府内」で製作されたことが判明した。また、ソント・鉱山のインゴットそのものが「櫻町」の調査第22次調査で一点出土している。

さらに、キリスト教徒に関わる遺物に錫と鉛の合金製指輪(第43次調査)や、信仰の証として身に付けていたロザリオの珠であるガラス製シタツが「櫻町」(第28次・48次調査)・「称名寺」(第80次調査)などで出土しており、多数のキリシタンが存在していたことを示している。第4南北街路の「中町」に面し「ダイウス堂」と記された施設が「府内古図」にあり、これは教会や日本初の西洋式病院などかなるキリスト教関連施設とされている。その南側の第10次調査区において教会の墓地の一角が調査され、その中の長方形木棺墓一基から全身を伸ばし仰向けで両腕を胸に組んだ状態の成人人骨(性別不明)が検出された。十六世紀後半の遺墓と考えられるが、この時期の死者は身を屈めた状態で葬られるのが一般的であり、全身を伸ばした人骨はキリスト教徒と判断されている。

「櫻町」は大友館の前面にあり、間口三〜六丈の建物三十数棟が立ち並んでいたとされる。その北端の角地の調査(第12次調査)では、第二南北街路に面した二×五間の礎石建物と名ヶ小路に面した二×五間の礎石建物が「字状」に建ち、その中庭から青銅製品の鋳造炉跡が検出された。周辺からは緑青の付着した取瓶や鉄製金鉢も出土し、各種の青銅製品を製造していたことを物語る。また、包含層や整地層からは大友家家紋(三木紋)を付した太鼓形分銅十六点・蕨形分銅九点・八角形分銅三点など数多くの分銅や府内型メダイ七点なども出土しており、この屋敷の住人は青銅製品の製造のみならず計屋と呼ばれる両替商も兼ねていた可能性がある。これに加え、各種の貿易陶磁(中国・朝鮮王朝・タイ・ベトナム)の中にも元青花梅瓶は特に注目されるだけでなく、黒茶碗・風炉・茶臼などの茶道具の出土は裕福な商工業者に相応しい遺物である。



鑄造遺構と出土遺物 太鼓形・齒形分銅 真鍮製灰匙・ガラス製杯・真鍮製チェーン・鍍金唐枕ほか

「唐人町」と「名ヶ小路町」の調査（第88次）では、第二南北街路の東側堀から数多くの貿易陶磁や土師質土器などと共に、南ヨーロッパ産吹きガラス製品・真鍮製灰匙・真鍮製鎖・増埜・炉蓋・銅滓・漆器柄・下駄・独楽・獸骨・貝殻など多種多様な遺物が出土した。ワイングラスのような南ヨーロッパ産吹きガラス製品は国内最古であり、成分分析により植物灰ガラスに分類され今のところ「豊後府内」唯一の資料となる。また、香道などで用いられる灰匙に加え鎖も出土例の少ない遺物である。これらの遺物は、一五七〇〜一五八六年の間に「唐人町」の方向から廃棄されたものとされ、南蛮貿易などに従事した人々の豊かな暮らしが窺われる。

一方、増埜や銅滓などから「唐人町」には商人だけでなく各種青銅器の製造に関わる職人達も居住していたことがわかる。さらに、出土した獸骨の分析では多くの骨に解体痕が観察され、中国系の住民はウシ・ウマ・イノシシ・シカ・イヌ・ネコなどの哺乳類を盛んに食していたことや東南アジア産のフタが持ち込まれていた可能性も指摘されている。その他、本調査区の南側にあたる調査（第80次）の堀からは、「唐人町」から投棄された遺物の中に「朱漆鍍金楼閣騎馬人物文唐枕」と呼ばれる枕がある。側板の漆面に文様を彫り込み金箔を埋め込んでいるもので中国明代に制作されと考えられ、これまで出土例の無い国内唯一の資料であり唐人が持ち込んだ可能性が高い。

平成九年に行われた「横小路町」の裏手にあたる調査区（中世大友府内町跡第3次調査）では、天正十四年（一五八六）の島津氏の進攻に起因する火災処理遺構が発見された。二列五基の備前焼大甕を埋設し、酒の醸造や油の貯蔵などに用いる「甕倉」と呼ばれる遺構である。大甕の上半部分を削平等により失うが、内部や焼土を含む埋土層から大量の貿易陶磁が出土し注目された。陶磁器類の多くは火災による被熱を受け、約五割の中国産青花・青磁・白磁・華南三彩・中国南部産焼締陶器などに加え、朝鮮王朝産陶磁、タイ産焼締四耳壺、ベトナム産焼締長胴壺、ミャンマー産三耳壺などからなり、出土土器の約六割を貿易陶磁が占める。

これまでに、府内町跡の調査において貿易陶磁の出土は全体の約三割前後に止まることや、大型壺類の多くは南蛮貿易における運搬容器と想定されることなどから、この屋敷の住人は府内での商業活動と共に海外貿易にも従事した有力商人と考えられている。さらに、大友氏館北側の「唐人町」や東側の「今小路町」にも中国の人々が居住していたことを示す記録も残り、「豊後府内」は中国人をはじめ宣教師や修道士などのポルトガル人も住む国際色豊かな都市であった。

平成二十四(二〇一三)～二十五(二〇一四)

〇一三)に実施された旧万寿寺跡の南側に隣接する「片側町」と「寺小路町」の調査(中世大友府内町跡第97・101次調査)では、それまで断片的であった十六世紀後半～末の町屋構造が明確となった。掘立柱建物は梁行二間(三〇四じ)・桁行四〇五間(六〇七じ)で床面積は二〇三〇平方メートルとなる長方形建物を中心とする。町屋は一部の空閑地を置き第一南北街路と万寿寺南側の東西道路に直交しながら連続して形成され、その背後に井戸や土坑や廃棄土



東南アジア産陶器(容器)



妻倉遺構

坑が配置される構造となる。このような短冊形の町屋は「櫻町」・「御内町」なども確認され、「豊後府内」の一般的な構造とされる。さらに、兜・薬研・分銅・天秤皿・増塙などの各種出土遺物は様々な職種の商人・職人の存在を示している。大友義鎮(宗麟)と義統の時期に最盛期を迎えた府内であったが、朝鮮出兵における義統の失態により除国(一五九三年)となり、豊後国は豊臣秀吉の蔵入地となった。その後、十七世紀初めに竹中重利により府内城が完成すると府内の町屋や寺院もほぼ全移転し、その後は耕作地となったことにより一部削平を受けているものの、大友館跡や町屋など多くの遺構が保全され現在にいたっている。そして大友氏館跡と旧万寿寺跡は国史跡に指定され、平成二十七年(二〇一五)に大分市教委により『史跡大友氏遺跡整備基本計画(第一期)』が策定され長期間に及ぶ整備が計画されており、その完成後は南蛮文化発祥都市の拠点として広く人々に親しまれる存在になることが期待されよう。



中世大友府内町跡出土遺物

五 遺跡の保存・保護を目的とした調査

昭和四十五年（一九七〇）、大分市大字三芳の丘陵南側斜面（標高約五十〜十五五）の中ほどに所在する古宮古墳ではその保護を目的とした調査が実施され、古墳時代の墳墓において県下で唯一その被葬者の名前が想定される古墳となった。一辺約十二、高さ五五の方墳で、長さ二・五、高さ一・七七、幅一・六五の巨大な阿蘇凝灰岩の内部を割り貫いた石棺式石室を主体部とするが、このような主体部は近畿地方に多く地方においては類例をほとんど見ない。そして古墳の規模は「大化の薄葬令」の規定では大臣クラスの「上臣」に相当する。

この時期に中央で活躍した人物に「大分君惠尺」が知られる。惠尺は天武天皇の舍人として壬申の乱（六七二）で大きな活躍を見せ、その死後に天皇から従三位に相当する「外小紫位」を贈られており、古宮古墳の規模や主体部はこの位に相応しいものである。さらに、古墳の立地も大陵から新しく伝来した子孫繁栄を祈念する「風水思想」に基づいた最新の埋葬思想による造墓でもある。これらから国史跡に指定されると共に平成四（一九九二）〜七年（一九九五）に保存修理事業が行われ、当初の姿に復元整備され公開されている。

宇佐市を流れる駅館川下流の右岸台地に位置する免ヶ平古墳は、「宇佐風土記の丘」建設に伴い昭和四十七年に県教委と宇佐市教委により調査が実施され、昭和六十二（一九八七）〜平成二年（一九九〇）には古墳の保存修理に伴う調査が行われた。赤塚古墳に次ぐ古墳時代前期中頃の造営で、覆石で覆われた墳丘は全



古宮古墳 発掘調査



免ヶ平古墳主体部 出土銅鏡・石劍・勾玉など

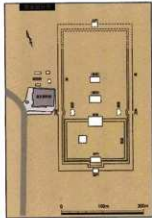
長五十、後円部径三十、高さ四を測り、堅穴式石室と石棺の二つの主体部を持つ。堅穴式石室は長さ五、幅約一、高さ約一と規模が大きく、内部に長さ五、直径七十の割竹形木棺が置かれていたと考えられている。人骨は残っていないが、胸と推定される部分から硬玉製勾玉と碧玉製管玉が、腰の周辺から多数のガラス玉が、左右の手首付近から石劍各一点が、頭部の右側から石劍一点が出土し、これらの装身具のみ棺内副葬されていることから被葬者は女性の首長である可能性が高いと考えられる。また、木棺の外からは鏡二面（中国産斜縁二神二獸鏡・国産三角縁三神三獸鏡）、武器（刀・劍・槍）、農具（鎌・鋤先・斧・施・刀子）など様々な副葬品が出土した。三角縁神獸鏡は、大阪府紫金山古墳出土鏡などと同じ鋳型で造られたもので被葬者は畿内政權との密接な関係を持っていたことを窺わせる。

堅穴式石室の南側に平行してほぼ同時に造られたと判断された石棺からは、成人女性人骨一体が検出され中国産斜縁二神二獸鏡一面、碧玉製石劍二点、硬玉製勾玉二点、碧玉製管玉二十二点、刀子一点が副葬されていた。装身具の配置は石室と共通性が強く両者の密接な関係を示し、これらの出土品は国重要文化財に指

定されている。なお、免ヶ平古墳の周辺には弥生時代終末から古墳時代初頃の墳墓が存在し、赤塚古墳とは異なる集団の造墓活動と考えられる。この二つの古墳をはじめ、宇佐風土記の丘には角房古墳・車坂古墳・福勝寺古墳・鶴見古墳の計六基の前方後円墳が集中するが、各前方後円墳は埴輪を持たない所に共通性が認められる。そして、鶴見古墳を除きその周辺には方形周溝墓や円墳からなる集団墓が展開し、当地域における五つの有力集団とその首長が一定の間隔を置きながら造墓したことを物語る。なお、鶴見古墳は横穴式石室を主体部とし六世紀前半の築造で唯一単独で存在するが、石室の一部が崩壊していたためその修復と墳丘及び周溝の復元整備が行われ公開されている。園内を含め赤塚古墳周辺の方形周溝墓群や免ヶ平古墳は整備公開され、園内に設立されている大分県立歴史博物館では旧石器時代から中世の遺物や国宝富貴寺大堂や熊野磨崖仏などの実物大複製品が展示されている。このほか、宇佐市法鏡寺跡、同市光岡城跡、日田市ランドヤ古墳などで保存のための調査が実施されている。

昭和四十九(一九七四)～五十三年(一九七八)遺跡の保護を目的とし、大分市大字園分所に所在する国史跡の豊後園分寺跡の調査が実施された。標高約三十メートルの台地上に形成された境内は東西一八二メートル、南北二九二メートルと広大な面積を占め、中門と金堂を回廊で囲んだ内部の西側に七重塔を、金堂の北側に講堂と食堂を直線的に配置したと考えられている。奈良時代後半の創建期軒丸瓦は復弁十葉蓮花文、軒平瓦は扁行唐草文など大宰府系瓦を中心とし、八世紀中頃に大宰府の強い影響下に建立されたことを示す。また、出土土器などから平安時代の後半には一時廃絶し、鎌倉時代に至り天台宗寺院として復興したようである。

また、平安時代前期(九世紀前半)の土師器に「天長九年 尼寺」の墨書が認められ、八三二年頃には近くに園分尼寺



豊後園分寺跡 伽藍配置

が存在することを示している。その後、豊後園分寺は史跡整備が行われ、隣接する大分市歴史資料館では先史・中世の遺物や民俗資料を始め、七重塔の十分の一の復元模型なども展示されている。

亀塚古墳は大分市大字里の別府湾を望む標高約三四メートルの台地上に立地し、前方部・後円部ともに三段築成で全長百十五メートルを測る県下最大規模の前方後円墳である。国の史跡に指定され、平成五(一九九三)～六年(一九九四)度に保存整備を目的とした発掘調査が実施された。その結果、盗掘を受けていたが五世紀初頃の造営で結晶片岩製の箱形石棺を第一主体部とし、その東側には小口積石室の第二主体部が後に造られていたことが判明した。第一主体部からは、勾玉・管玉などの玉類や短甲・鉄刀・鉄剣・鉄鏃が出土したほか、周辺からは家形埴輪が検出されている。



整備された亀塚古墳

また、円筒埴輪・朝顔形埴輪を始め靱形埴輪・蓋形埴輪・船形埴輪など多種多様な埴輪が樹立され、畿内地方と変わらない埴輪祭祀が行われていた。

この規模や構造及び出土遺物は正に海部の首長にふさわしいものであり、平成八(一九九六)～十一年(一九九九)度にこの北側に所在する小亀塚古墳と共に築造時の姿に復元整備され、ガイダンス施設(海部古墳資料館)も合わせて設置された。一般公開されている。

杵築市大字狩宿の丘陵上(標高約七十七～八十四メートル)に所在する小熊山古墳は、杵築市教委により平成元(一九八九)～十四年(二〇〇二)に調査された県下最大級の前方後円墳であるが、それまでその存在は全く知られていなかった古墳である。調査により全長約百十三メートル、前方部長は約四十三メートルで二段築成、後円部は直径約七十メートルの三段築成で、主体部の構造等は判明していないが堅穴式石室である可能性が高い。遺物には円筒埴輪・楕形埴輪・二重口縁蓋形埴輪・単口縁蓋形埴輪など各種埴輪が出土している。円筒埴輪の口縁部は受口状をなし、胴部に巴



小熊山古墳・御塔山古墳位置図 小熊山古墳壺形埴輪



形や方形の透かしを設けており九州内では類例は無いが、奈良県天理市東殿塚古墳の埴輪に類似しその関連性が指摘されている。

単口壺形埴輪は、口縁部がほぼ直線的に外に開き胴部はやや大きく張り出す特徴が認められ、同様の土師器壺は古墳前期前葉から中葉に多く知られる。これらから、小熊山古墳は古墳時代前期前葉でも新しい時期の造営と思われるが、県下で本格的な埴輪祭祀を初めて導入した古墳として注目される。また、立地は伊予灘や別府湾の海上から顕著にその姿を見る場所であり、被葬者はこの間の海上交通を掌握していた人物で、畿内政権との深い関わりを持つていたと想定される。

一方、首長が居住した館とこれを支える集落がどこに存在したかについては不明であるが、杵築市とその周辺一帯には存在しないようである。小熊山古墳の南側に隣接する岬の上には御塔山古墳が存在し、本古墳もそれまで未確認であったが、昭和六十三年（一九八八）度の測量調査に始まり、平成二十

三年（二〇一一）度まで杵築市教委による確認調査が実施された。その結果、直径七十五センチの三段築成の円墳で南側に造出を設け、出土埴輪には円筒埴輪・朝顔形埴輪・家形埴輪・盾形埴輪・蓋形埴輪・船形埴輪などに加え、囲形埴輪や木桶形土製品など県内では出土例がほとんど無い埴輪が認められた。これらは五世紀前葉ごろに置かれ、この時期の円墳としては県下最大級の規模を持ち、小熊山古墳と共に国指定史跡となった。

日田市大字小迫の標高約百十五メートルの台地上に所在する朝日天神山1・2号墳は、平成九（一九九七）～十五年（二〇〇三）度に県の史跡指定を旨し日田市教委と別府大学により調査された前方後円墳である。1号墳は全長約三十四メートルで横穴式石室を主体部とし、昭和三年（一九二八）の天満社造営時に須恵器・変形五獣鏡・太刀・馬具・耳環・三輪玉などが出土しており、これらの遺物から六世紀後半に置かれている。2号墳は全長六十五メートルを測り、鍵形に巡る二重周溝の内側周溝から埴輪と同様に墳丘に樹立されていたと考えられる須恵器大型平底壺四十個体以上や大型器台が検出され、六世紀第二四半期の築造とされる。この規模は六世紀代の前方後円墳としては県下最大であり、須恵器大型平底壺は県内に類例は無く福岡県で春日市赤井手古墳などの三例、熊本県で一例が古墳から出土し



朝日天神山2号墳



朝日天神山2号墳出土大型平底壺

ているのみであり、朝鮮半島の影響下に出現したのではないかと指摘されている。

また、1号墳出土の三輪玉は畿内政権との深い関係なくしては保有困難な遺物であり、両古墳の被葬者の地位の高さを示す。そして、2号墳の被葬者は筑紫国造「磐井」の乱（五二七年）の後に筑紫の背後で要衝にあたる当地域に中央から派遣され、1号墳はその後継者と推定され、1号墳はその後継者と考えられよう。

中津市の長者屋敷官衙遺跡は、平成七年（一九九五）度に市営住宅の建て替えに伴う調査により奈良く平安時代の南北方向に直線の並ぶ掘立柱建物十一棟・溝・柵列などが遺構と大量の炭化米が検出され、下毛郡の正倉である可能性が高まり注目を集めた。中津市教委では遺跡の全貌把握と保存のための調査を平成十九（二〇〇七）～二十九年（二〇一七）度にわたって実施している。その結果、標高約三十百の洪積台地上に南北百二十百・東西百の柵列や溝で区画された内部に、し字形に配置された掘立柱建物（正倉）十八棟や管理施設と考えられる側柱建物四棟の存在が確認された。



長者屋敷遺跡主要建物群



長者屋敷遺跡出土円面硯・炭化米・須惠器

これらの建物は、二度の火災を挿み八世紀前半、八世紀後半、九世紀前半の三期に分かれることも判明した。出土土器は須惠器環・甕や円面硯などが認められたが、全体的にやや少ないと言えよう。一方、地方ではほとんど検出例のない轆轤遺構（旗を建てる施設）が確認されただけでなく、郡の正倉の実態や規模および変遷が明らかとなったことは全国的にも非常に稀であり、国史跡として保護され、共に今後その整備・公開が検討されている。

フランシスコ・ザビエルが大夫宗麟の招きにより豊後府内に来た一五五一年以降、府内では多くの人々がキリスト教に入信していった。このキリスト教徒の墓の実態が初めて明らかとなった遺跡が臼杵市の下藤地区キリシタン墓地であり、野津川左岸の北側に緩やかに傾斜する台地上（標高約百十百）に所在する。

平成十二（二〇一〇）～十七年（二〇一五）に臼杵市教育委員会により調査され、手足を折り曲げる屈葬や座葬ではなく全身を伸ばして葬られた伸展葬の長方形石組遺構（木棺墓）六十五基、十字架を建てたと見られる石敷広場状遺構、道路状石敷遺構、札持堂が建てられたと推定される礎石建物状遺構、などに加え「INRI」の文字を刻む石製十字架も出土している。

県内でこれほど大規模なキリシタン墓地の調査は初めてであり、副葬品をほとんど持たないことも特徴の一つである。その造墓は十六世紀第四半期頃から開始され、十七世紀中頃には幕府の禁教強化により終焉を迎えたようである。そして、文献の調査から墓地の形成にあたり下藤村の有力キリシタンであるリアン（理庵）と言う人物が指導的役割を果たしたことも判明するなど多くの成



下藤地区キリシタン墓地

果が得られ、国史跡に指定されることとなった。

県教委では各種開発事業に伴う発掘調査だけでなく遺跡の保護・保存を目的とした調査を実施している。平成五・六年（一九九三・四）度は「県内装飾古墳発掘調査事業」において、日田市穴観音古墳・同市ガランドヤ古墳群、玖珠町鬼塚古墳、別府市鬼の岩屋古墳群、大分市千代丸古墳、中津市城山装飾横穴墓など十七基の記録保存を行うと共に、装飾古墳保存の課題と対策を示した。平成七（一九九五）～九年（一九九七）度には、前方後円墳をはじめとする大型古墳保存の基礎資料作成のため、「中世城館等（主要古墳）発掘調査事業」を実施した。豊後大野市三重町立野古墳、豊後高田市猫石丸山古墳の測量・発掘調査と豊後大野市三重町小阪大塚古墳の測量調査で、それまで実態が詳しく判明していない地域の前方後円墳を重点に実施し、以後の古墳保存の対策や課題が提示された。

同時に開始された中世城館の調査は、平成十五年（二〇〇三）度までの九カ年及び長期の調査となった。その内容は城館の分布調査と縄張り図の作成、伝承



角牟礼城跡



豊後府内より高崎城を望む

等の聞き取り調査、県内市町村の字図のマイクロ化と地形図の収集、文書や記録の収集などである。県下全域で確認された城館は五百六十九箇所を数え、縄張り図が作成された城館は百五箇所に及び、県内における中世城館の地域性や変遷等が明らかとなり、今後の保護・保存の重要な資料となる。

鎌倉時代に武士が平地に土塁や溝などにより方形に区画し構築した館は、戦国時代になると規模を増した堀と土塁などによつて守られた城館が低丘陵や台地の上に築かれるようになり、十五世紀後半以降は急峻な山の上に山城が次々と形成されて行く。また、十六世紀後半の天正年間には差し迫る戦いに備え、より防御性の高い畝状堅堀などを施した城郭に改築される。高崎山城など中世山城の特徴は、堀切・堅堀・切岸・曲輪・土塁・櫓などによる城館の構築であり、大友氏とその一族が領内において石垣や礎石建物・瓦葺建物などからなる城郭を築城することは無かった。

平成十六（二〇〇四）～十九年（二〇〇七）度には、「西南戦争戦跡分布調査」が実施された。明治十年（一八七七）、薩軍は熊本を経て北上したが熊本城に籠もる熊本鎮台に阻まれ、野村忍介率いる奇兵隊を大分方面に侵入させ本州を目指した。五月から八月の間、主に県南部の山中で官軍と戦闘を繰り返したが戦場の跡は放置されたままであった。本調査は、それまでほぼ調査されることなかった戦跡（台場跡）の確認と図化及び銃弾・薬莖・砲弾などの資料収集



佐伯市大原越への18号台場

西南戦争の薩軍の台場跡

を目的として実施された。その結果、確認された戦跡は八百六十六箇所に及び、その多くは佐伯市宇目・直川の丘陵上に集中し、大原越においては官軍による西洋式多稜堡壘など特異な台場跡の存在も確認された。さらに、椎葉山からは両軍の銃弾・薬莖などが出土し、この時期の薩軍は鉛の欠乏により錫と鉛の合金弾や銅弾を使用していたことも判明している。

平成二十(二〇〇八)〜二十八年(二〇一六)度にかけて「大分県古代・中世石造物遺物分布調査」が行われ、大分県下全城の平安時代から江戸時代初頃に及ぶ石造文化財の悉皆的調査が実施された。過疎化の進行や山林の荒廃によりその所在も忘れさら



左) 中尾五輪塔 鳴板碑 岩戸寺宝塔 右) 臼杵石仏

ようとしており、石造物の全体把握はその保存・保護・活用に緊急の課題であった。調査の結果、約三千六百箇所で二万八千基を超える石造物の存在が確認された。その結果、五輪塔と国東塔などの宝塔が宇佐・豊後高田・国東の三市に多く分布し、宝篋印塔は豊後大野市から大分市に多く、石幢は豊後大野市に多いことなど石造物における地域性の確認もされた。また、記年銘から十四世紀代に造立が急増すること、その七五割を五輪塔が占め次に宝塔→宝篋印塔→板碑→石幢→国東塔→無縫塔の順に少なくなるなど多くの知見が明らかとなった。報告書では基準となる各種石造物の実測図や写真を示すと共に記念銘を基にした編年図も提示されている。この間、中津市教委により行われた羅漢寺石仏の調査では、羅漢寺の五百羅漢が全国的に最も古い十四世紀中頃〜後半に造立されていたことが判明したことも非常に重要な成果であり、これにより国指定重要文化財となった。

大分県立埋蔵文化財センターでは開発事業に伴う調査に加え、今後このような遺跡の保護・保存と継承を目的とした調査を継続して実施していくと共に、常設展示や企画展示及び体験学習などによりその成果を広く一般に公開し活用する予定である。

(文獻)

江戸時代以前

日田郡教育界「増補 淡路全集 上巻」一九二五

斉藤 忠「年表で見る日本の発掘、発見史①奈良時代、大正篇」一九八〇 NIKKブックス

勅使河原彰「日本考古学史 年表と解説」一九八八 東京大学出版会

『大分発掘ものがたり』よみがえる部、歴史、一〇〇七 大分県立歴史博物館

渡辺幹雄「穴箱横穴墓の遺物と出土記録」『おいた考古』第五集 一九九二

緒方町誌 二〇〇一

戦後

賀川光夫「白塚古墳について」一九四八

賀川光夫「豊後国佐伯市下城弥生式遺跡の調査」一九四九

鏡山猛、賀川光夫他「大分県国東町安国寺弥生式遺跡調査報告」一九五八 九州文化総合研究所編

大分県教委「野間古墳群 横尾貝塚」二〇〇八

大分市教委「横尾貝塚」二〇〇八

大分県教委「横尾貝塚」二〇〇八

国東町教委「安国寺遺跡」一九八九

大分県教委「早水台」一九五五

大分県教委「早水台」一九六五

大分県教委「弥勒寺遺跡」一九六一

大分県教委「法鏡寺跡・虚空蔵寺跡」一九七三

大分県立宇佐風土記の歴史民俗資料館「弥勒寺」一九六四

大分県教委「大分県竹田市戸上七ヶ森古墳」一九五六

後藤直巳「聖ヶ森洞穴遺跡」『大分縣地方史』第三十四号 一九六四

岩男松英・酒匂義明「遠見郡山香町大字廣川原田洞穴の調査」『大分縣地方史』

第三十四号 一九六四

賀川光夫・西本豊弘・永嶋正春・途部慎・大坪芳典・綿貫俊「特集 川原田岩陰遺跡」

『おいた考古』第9・10集 一九九八

賀川光夫「大分県大野郡緒方町大石遺跡」別府大学 一九六六

賀川光夫「大分県の考古学」一九七一 吉川弘文館

国東町教委「安国寺遺跡」一九八九

大分県教委「台ノ原遺跡」一九七五

大分市教委「守岡遺跡」一九七九

大分県立宇佐風土記の歴史民俗資料館「免ヶ平古墳」『大分県立宇佐風土記の歴史民俗資料館研究紀要』Ⅲ 一九八六

大分県立宇佐風土記の歴史民俗資料館「免ヶ平古墳」史跡川部・高森古墳群保存・修理

事業報告 一九九一

大分県教委「立石貝塚」一九七四

大分市教委「豊後国分寺跡」一九七九

橘 昌信「大分県二日市洞穴発掘調査報告書」別府大学付属博物館 一九八〇

大分市教委「古宮古墳」一九八一

大分市教委「御幡遺跡」宇佐地区遺跡整備関係発掘調査概報 Ⅰ 〇 一九八二

宇佐市教委「御幡遺跡」宇佐地区遺跡整備関係発掘調査概報 Ⅰ 〇 一九八二

中津市教委「伊藤田城山築群跡」一九八五

賀川光夫他「原史」『本耶馬溪町史』一九八七

賀川光夫他「大分県粉洞穴の調査概報、第一・二次調査」『考古学論叢』四 一九七七

賀川光夫他「原史」『本耶馬溪町史』一九八七

山崎純男「大分県中津市本耶馬溪町粉洞穴出土の貝刀について」『先史学・考古学論究』

甲元眞之先生追任記念 上巻 二〇〇一 龍田考古会

大分県教委「雄城台遺跡第八次発掘調査の概要」一九八七

国東町教委「羽田遺跡(Ⅰ地区)」一九九〇

大分県教委「上ノ原横穴墓群」Ⅰ 一九八八・一九九一

竹田市教委「菅生台地と周辺の遺跡X V 石井八口遺跡 石井八口北遺跡」一九九二

大分県教委「飯田二反田遺跡」一九九三

大分県教委「大分の装飾古墳」一九九五

大分県教委「一般国道0号 宇佐道路埋蔵文化財発掘調査報告書③」横山遺跡 尾畑遺跡 一九九五

大分市教委「国指定史跡古宮古墳保存修理事業報告書」一九九六

安岐町教委「ノ瀬古墳群」一九九七

大分県教委「大分県南方後円墳 三重・西国東地区編」一九九八

大分県教委「スギノ公園内遺跡群発掘調査報告書」一九九九

大分県教委「龍頭遺跡」一九九九

大分県教委「日田市教委「小迫辻原遺跡Ⅰ」一九九九

大分市教委「国指定史跡亀塚古墳整備事業報告書」二〇〇〇

- 日田市教委『小迫辻原遺跡Ⅱ』二〇〇〇
- 天理市教委『西殿塚古墳・東殿塚古墳』二〇〇〇
- 大分市教委『下郡遺跡群ⅠⅤⅥ』二〇〇〇～二〇〇一
- 千歳村教委『鹿道原遺跡』二〇〇一
- 大分県教委・久任町教委『都野原田遺跡』二〇〇一
- 中津市教委『長者塚遺跡』二〇〇一
- 中津市教委『長者塚教育街遺跡 4～1次調査』二〇一五
- 国東市教委『飯塚遺跡』二〇〇一
- 大分県教委・久任町教委『仏原千歳塚古墳群』二〇〇二
- 大分県教委『八坂の遺跡』二〇〇三
- 大分県教委『長湯横穴墓群 桑畑遺跡』二〇〇四
- 日田市教委『吹上ⅠⅣ』二〇〇三～二〇〇六
- 日田市教委『朝日天神山古墳群』二〇〇五
- 大分市教委『海部の遺跡Ⅰ』二〇〇五
- 大分県教育庁埋蔵文化財センター『澤久見門前遺跡 瀬戸遺跡ほか』二〇〇五
- 杵築市教委『小熊山古墳発掘調査報告書』二〇〇六
- 大分県教育庁埋蔵文化財センター『西南戦争戦跡分布調査報告書』二〇〇九
- 大分市教委『城原・里遺跡 第5・7・8・9・1次調査報告書』二〇一〇
- 宇佐市教委『川部遺跡南西地区墳墓群』二〇一〇
- 大分県教育庁埋蔵文化財センター『伊藤田築跡群発掘調査報告書』二〇一〇
- 大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内 1～19』二〇〇五～二〇一五
- 長直信『須磨寺からみた地域間交流―豊前・豊後を中心に―』第8回九州前方後円墳研究会
熊本大会「古墳時代の地域間交流Ⅰ」二〇一三
- 杵築市教委『御塔山古墳発掘調査報告書』二〇一三
- 日南市教委『下藤地区キリシタン墓地』二〇一六
- 大分市教委『大友府内 1～26』二〇〇〇～二〇一七
- 大分市教委『大友氏館跡Ⅰ』二〇一五
- 大分市教委『大友氏館跡Ⅱ』二〇一七
- 大分県教委『豊後府内 1～9』二〇〇五～二〇一五

- 大分県教委『大分の中世城館 第1～4集』二〇〇一～二〇〇四
 - 大分県教育庁埋蔵文化財センター『大分の中世石造物第1～5集』二〇一三～二〇一七
 - 大分県教育庁埋蔵文化財センター『加原遺跡』二〇一四
 - 大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内を語るⅠ』二〇一六
 - 大分県教育庁埋蔵文化財センター『森の木遺跡発掘調査報告書』二〇一六
 - 大分県教育庁埋蔵文化財センター『疎山遺跡』二〇一六
 - 大分県教育庁埋蔵文化財センター『大分石造物Ⅰ中世編Ⅰ』二〇一六
 - 大分県教育庁埋蔵文化財センター『四日市遺跡Ⅰ』二〇一七
 - 大友館研究会編『大友館と府内の研究―大友家年中作法日記を読む―』東京堂出版二〇一七
 - 中津市教委『法垣遺跡3次・4次調査・本文・遺構・遺物図版・石製品写真図版・編纂求編』
二〇一八
- 写真については、宇佐市教育委員会、大分市教育委員会、杵築市教育委員会、国東市教育委員会、
九重町教育委員会、竹田市教育委員会、中津市教育委員会、日田市教育委員会、豊後大野市教
育委員会より提供を受けて掲載しています。



一方平 I 遺跡出土 接合資料



羽田遺跡出土 蛇頭



雄城台遺跡出土 巴形銅器



一ノ瀬2号墳出土 鳥舟付器台



四日市遺跡出土 越州窯青磁唾壺



中世大友府内町跡出土 ヴェロニカメダイ

大分県立埋蔵文化財センター 研究紀要 2

平成31年3月29日 発行

編集・発行 大分県立埋蔵文化財センター

〒870-0152 大分市牧緑町1-61

電話 0097-552-0077

OITA PREFECTURAL CENTER
FOR ARCHAEOLOGICAL RESEARCH

BULLETIN

Vol. 2

Archaeological History of Oita Prefecture

MIYAUCHI Katsumi

Archive Annual Report (Fiscal 2018)

Archive Directory

March 2019